

リトルアーモリー 明日への弾丸

Matilda6489

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

不運な事故で命を落とした主人公。

転生した先の世界で目にしたのは、自分の知っている日常とは…全く違う日常だった。

平和な現代から転生した、か弱い主人公が——ちよつとあべこべで…銃を所持するのが当たり前となった世界で生き、順応しようと努力し、成長していく話。

# 目次

民間人

プロローグ | 1

第1話 逃走劇 | 12

第2話 出会い | 23

第3話 決意 | 33

新入り

第4話 戦うために | 51

第5話 護るために | 69

番外編1 聖夜と人恋しい教官 | 82

第6話 オペレーション・フレンド | 95

## 民間人 プロローグ

過去の人生を振り返りながら、私は運が悪いと思う、世界で最も不幸なんじゃないか…とすら思っていた。

普通に考えれば、世界中に私よりも不運な者が居るだろうし、紛争もない平和な生活が送れるだけ不幸じゃないと分かっている。…が、それはそれとして、やはり自分は不運で不幸だとしか思えなかった。

会社員や軍人とかでもよくある、自分の職務（任務）が一番つらいと思うような感じだろうか。

私の生まれ育ちは日本の田舎でもない、しかし大都市でもない、コンビニや駅もあって特に不便は感じない地方都市。

家族は母、姉、そして息子の自分で三人家族。

…父親についてはよく覚えていない、私が物心がつく前に離婚したらしい。

母は情緒不安定で、急に怒るのだ。大した理由もなく。

…姉は最悪だった。姉は女王様気質だった。自分の思い通りにならないとすぐに憤怒した。

容貌もそれなりに良く、一時期はアイドル事務所にも所属していたし、割と何でもこなすので、周りはいっただって、もてはやす。

祖母も大変可愛がり、何でも願い事を叶えた…こうして姉は、『世界は私中心なの』系女王様になった。

姉と私はよく対立した。正確には向こうから突っかかってきて、大声で話す外向的な性格をした姉と、物静かな私。

そんな性格の姉は、無神経な発言を繰り返して、私や母をイラつかせた。

そして女2人、男1人家族で一番地位が低い男の私が巻き添えにな

り、暴言を吐かれたり殴られたりするわけだ。

簡単にまとめると：母はヒステリー気味で、姉は大変性格が悪かった。

祖母は真つ先に姉を気にかけるし、祖父もあまり優しくなかった。最も年齢が低く、要領が悪い私はあまり：愛されなかったと思う。ただただ苦痛で、うんざりだった。

おかげで——家族、という言葉には全く：いい印象が無い。

育ててくれた母には恩があるので、独り立ちした今もある程度手伝ってはいるが、

あまり思い出したくないので、なるべく自分から家族と距離を置いている。

ならば友達を作ろうとしたが、なかなかうまくいかなかった。

待っていても誰も私には話しかけないし、勇気を出して話しかけても、口下手なせいで変に浮いてるやつ認定されたり。つらい。

こうして誰かに話しかけるのが怖くなり、時間がたち歳をとって、他人に興味がなくなっていく。

狭く深くの親交関係を続けるうちに、一応仲のいい親友も数人できたが、最近仕事が忙しいらしく疎遠さみ。

だから、私はほとんどの場合1人だ。でも、不満はなかった。

仲のいい友達と居るのはもちろん楽しいが、むしろ1人で居ること：孤独が好きだった。

寂しいという感情もあるが、そこまで深刻じゃない。

1人はいいい。：誰にも気を使わなくていいし、楽だ：とても快適だ。

こうして悲観的、否定的、消極的で引つ込み思案にコミュニケーション障害、他人と女性へ苦手意識を持ったのが私だ。

そんな私にも趣味がある。ゲームや軍事、映画、色々あるが…何よりアニメに小説といった二次元だ。

現実の女性に苦手意識を持った私が二次元に逃避し、ガチガチのオタクになるのにそう時間はかからなかった。

二次元の何がいいか、優しい世界だ。

誰も暴言を吐いたり、何度も無情に殴られたりしない、あつたとしてもだいたい救われる。

大抵のキャラクターは裏表がなく、あつたとしてもツンデレとか微笑ましいものだ。

そんな優しい世界が大好きだった。

…どうして私は今までの人生を振り返っているんだろうか？

ああ、そうだった

自身の一生の記憶が瞬く間に脳裏に再生される現象…なんだったか

——死ぬのか、俺

血だまりの中でぼんやりと空を眺めた。

・  
・  
・

数十分前

「…はあ…」

小さなため息は白い息となって空気に舞う。

12月の肌寒い季節、息の中にあつた水蒸気は急に冷やされ、人間

の目に見える細かい水の粒になった。

内気な性格をしている私は、基本的に声を出さない。無口なのだ。無口というか喋りたくないだけだが：正直、最後にまともに雑談やら会話してコミュニケーションをとったのは、いつだったか？

もはや職場でも必要最低限のことしか話さないの、発音すら面倒になってきた。

何か人間として色々終わってる気がするがどうでもいい、どうせ俺なんか誰も見てないし…。

もし人の心が読めるAIがいたら”見かけによらず随分お喋りなんです”なんて言われていることだろう、技術がそこまで進歩してなくて良かった。

…さつさとコンビニで買い物済まして帰ろう。

「いらっしやいませー」

いつも通りの店員の挨拶に、買い物をしている人々。変わらない日常。

今日は待ちに待った金曜日、花金というやつだ。

夕食の弁当に、つまみにお菓子を買い物かごに入れていく。

退屈な仕事を終えて疲労困憊な私は、今夜と土日の休みに心を躍らせた。

それにしても店内は暑い、暖房かけすぎでは…？

ついさつきまで寒い屋外に居た私にこの急激な体温変化は不愉快で、じわじわと汗ばんできた。

もう少し買い物をしていたかったが、耐えきれず素早くレジで会計を済まし、店を出る。

自動ドアが開いた瞬間、刺すような冷気が肌に流れ、メガネが急激な温度差で曇った。

この季節はこれがキツイな…やれやれ、とメガネを拭いて掛け直した後、

いつも通り音楽プレイヤーを起動してイヤホンをはめ、改めて帰路につく。

運動音痴で体力もない私だったが、こうしてのんびり歩くのは嫌いじゃなかった。

公園ではJKたちが寒い、なんて言いながらはしゃいでいる。女性へ苦手意識を持つ私だが、遠くから見たりする分には平気だ。簡単に言えば自分に敵意だとか害が無ければ、そこまで深刻に悩む必要はない。

歩きながら見慣れた街を見渡す。

12月の寒い冬の夕方、この季節ではよく見る少し黒っぽくて青い空。

真つ暗ではないが、薄暗くなった街中を街灯が照らし、多くの乗用車がライトを点け、その隣を警察車両が走っていく。

歩道には学生に、それからスーツを着て疲れ切った大人や、買い物袋を持って歩く女性。

どこにでもある現代 日本国の風景だ。

しかし、今日は違った。

帰り道で使う交差点で信号待ちしていると、どうやら帰宅ラッシュと同じタイミングになってしまったのか、やけに人が多くなってきた。

まるで満員電車：とは言いすぎかもしれないが、それくらいの人混みだ：駅前だから仕方ないか。

「ねえねえ、あれ見て」  
「なんかヤバくない？」

ヒソヒソと周りの人々が静かに、しかし段々と大きくざわめきだした。

よく見えない、何があったんだろう。

とりあえず耳からイヤホンを外し、必死に身を振じらせ目を凝らす。

どうやら車両が暴走してるらしい、警察車両が暴走車の後ろから必



死に追跡している。

車高は低く、眩しいライトハイビーム、圧倒的存在感を放つネオン、紫に金というか毒々しい車体カラー。

信号を無視し、道路を逆走しているその車は何というか…その…随分ガラの悪そうな…

いや、正直に言うとな下品で頭の悪そうな車だ。

まあ馬鹿な若者と苦勞人警察が、Need for なんとか、をやるのはどうでもいい。

問題は彼らの進路上に、我々が居ることだ。

ここの横断歩道がある道路は緩いカーブになっていて、少し左に行かないとガードレールに衝突する。

あの速度で減速せず突っ走ったら、ガードレールなんか役に立たず突破されるだろう。

嫌な予感がした私はさっさと抜け出そうとするが、密集した人混みからうまく抜け出せない。

少し強引に動くと、野次馬のおじさんに強く肩を当ててしまい睨まれる。す、すみません…。

完全にビビった小心者の私はそこで恐縮して抜け出すことを諦めてしまう。

今この瞬間にも車はぐんぐん迫って来ていた。

「ちよつとまづいんじゃないの」

「どーすんのこれ」

スマホやカメラで写真と動画を撮っていた人たちが、今更騒ぎ始める。

ちよつと危機管理能力低すぎない？ 大丈夫？

「おい、逃げないとまづいぞー」

一気にパニックになった大勢が右へ左へ、逃げたい方向へ無理やり行こうとするので大混乱になった。

人混みの真ん中らへんにいた私は、もみくちゃにされ身動きとれない。

ようやく人が少し減り、私は動けるようになったが、暴走車はもうすぐ近くだ。

最悪なことに車の進行方向には自分と…、恐怖で座り込んでしまった女子高生が居た。

—— 助けないと！

人を助けるのに、誰かを助けるのに理由なんていらぬ。

自然に脳と体が動いて、彼女の腕を無理やり引っぱり、全力で足を前に動かす。

とりあえず車線上から離れ、もう大丈夫だろう、と安堵した…が

暴走車が進路を変えてこっちに来る。

ガードレールを避けて、カーブに行こうと思ったのだろうか。

急いで彼女を反対側へ突き飛ばし、車線上から逃がす。

自分も横断歩道の向こう側へと、地面に身体を擦り付け滑り込む。

全力で回避した、今度こそ安心だ——

次の刹那、視界の端から応援に来ていたパトカーが、勇敢にも横から突っ込んで行くのが見えた。

強い衝撃を受けた暴走車は曲がり、私の現在地へと…：…流れるように車体が向く。

スライディングのせいで、伏せの状態になった今のままでは、回避は間に合わない…。

—— 立て、早く、逃げろ。

脳が生存本能に警告し、視界がゆっくりになっていく。

必死に立ち上がった時、暴走車の乗員が見えた。

案の定、車を運転していたのは馬鹿そうな若い男女だった。

男のほうは心底焦った顔で、女のほうは泣き叫んでいて。

意図的にここに来た訳ではないことは表情から分かった。

たまたま…運悪く、私が車線上に居た。

スピードの出しすぎか、飲酒運転か、整備不良か。

そんなことはどうでもいい、どうすれば、どうすれば回避は間に合うのか——

次の瞬間、凄まじい衝撃音と共に視力が途切れた。

・  
・  
・

ゆっくりと目を開くと、徐々に——ぼんやりとだが、視界が戻っていく。

足音、悲鳴、サイレン音。…まるで耳に水でも入ったみたいだ、うまく音が聞こえない。

とりあえず立とう、何があつたか見ないと…

しかし、立ち上がれない。

力を振り絞ってゆっくりと頭を動かし、自分の体を見るため目を動かす。

ああ、そんな……嘘だろ……

ぼやけて見えにくいのが、酷い容体なのは…なんとなく分かった。

ガードレールはバラバラになっていて、その破片の一部が私の体に突き刺さっていた。

唐突に脳内で、色んな光景が映し出される。自分のこと。…家族、友人…。

私が死んだら、家族は何と思うだろうか。…あんな冷めた家族じゃ、きつと何ともないか。

友人たちはちよつと嘆いてくれるかもしれない。

…どうして私はこの状況で、今までの人生を振り返っているんだろうか？

ああ、そうだった

自身の一生の記憶が瞬く間に脳裏に再生される、パノラマ記憶だとか、走馬灯だったか。

どうやらこの現象は、危機的状況でどうにかして生き残る方法を探す脳の行動らしい——そんなようなことを聞いたことがある。まさか実際に経験するとは思ひもしなかったが。

最後まで足掻いてくれて嬉しいが、思い出したのはロクな人生じゃなかったってことだけだ。

——死ぬのか、俺…

諦念。もはやどうにもならない。

体を起こすのをやめ、ぐったりと力を抜いた。

血だまりの中で、ぼんやりと空を眺めた。いつの間にか、雪が降ってきている。

ストレートロングで真面目そうな女の子が視野に入った。

「……大…夫で……しっ…り…て……」

さつき助けた女子高生だった。無理やり引っ張って申し訳ないことをしたな、と朦朧とした意識で考えていた。

とても深刻な表情で焦っている彼女。自分のせいで…、と自らを責めているかもしれない。

はつきり言ってこんな惨事を目の前で経験したらキツいだろう。俺も病む自信がある。

日常に戻った後も精神的に引きずられたら後味が悪いので、何かしらフオローをしようと思ったが…、中々簡単には声が出ない。

自分に残された余命が残り少ないことを、本能的に感じた。自分の死期が分かるというのは有名な話だが、本当だったみたいだ。

自分が勝手に動いたことだから気にするな、と必死に声を捻りだして伝える。

それに自分は運がいいからきつと助かる、とも。

確かに自分は運が悪い、しかし今まで怪我をしてもそこまで大事にはならなかったのだ。

運は悪いが、ある意味運がいい…親友にもそんな意味不明なことを言われて茶化されたこともあった。

だから今回もきつと、きつとそうなのだ。

そんなうわごとを聞いた彼女は小さく笑って――

「……ホント、呆れるくらい前向きですね…つ。」

聴覚を失い始めていたはずの耳だったが、その一言だけはしっかりと聞き取れた。

顔にぽつりぽつりと冷たさを感じる。

今度は雪ではなく、彼女の涙だった。

なんとなくニュースで見るような交通事故。何故…ひかれたのが俺なんだ。

今日は世界で1番、俺が不運で不幸だ。最悪の日。そう言っているだろう、誰も文句ないはずだ。

危険を回避して、逃れたと思ったら更にその先にわざわざ危険が来た。

災難に不運と不幸が重なって、このザマだ。

「グッ…、…ガボツ…」

全く最高だな、と皮肉の1つでも言おうとしたが、自分の口から漏れたのは声にならない声と、真っ赤な血だった。

もうまともな声はでない。直ぐにコヒユツ、コヒューと虫の息のような呼吸になる。

同時に恐らく怪我をした位置から、ズキズキと痛みが増してきた。同時に焼けるような熱さも。

無慈悲に季節の寒さが私の体を包み込んだ。

更に見えなくなっていく視界と聞こえなくなっていく耳。恐怖と一緒にどんどん痛みが増してきて、口からは勝手にうめき声  
が漏れる。

「救…車…を呼…す…」

何処かに行こうとする彼女を、つい掴んでしまう。

寒くて、怖くて、何故か…今までそんなに感じたことのない感情、寂しさが急に押し寄せてきたのだ。

掴まれた彼女は驚いたみたいだが、しばらく困惑して、涙を流しながら少しぎこちない笑顔を作ってくれた後――

左手で私の手を握り、頭に右手を乗せてくれた。

それがとても暖かくて。

自分はゆっくりと目を閉じた。

## 第1話 逃走劇

「うわあああああつっつ!!!」

意識を取り戻したと同時に、大声を張り上げてしまった。滝のように汗を流し、肩が上下に揺れ、酸素を求めて何度も呼吸する。

まるで海で溺れかけて、ようやく呼吸ができるようになったような感覚だ。：先程まで文字通り、自分の血の海に沈んでいたの——あながち間違いではないだろう。

どれだけの時間、気を失っていたのか。数分か、数時間か。数日だったような気もするし、一瞬だったかもしれない。

悪いが静かに 知らない天井だ。：なんて言う余裕はない。死にかけ、いや、死んだのだ。落ち着けるわけがない。

というか、ここに天井はない。屋外だ。ゆっくりと自分の体を起こす。どうやら、崩落した家に倒れていたようだ。

「(っ)っ…どこだ?」

そうだ、ここはどこだ。天国でも地獄でもなさそうだな。

救助されたなら、普通は病院とか、救急車車内、せめて自宅とか、そういうところで目が覚めるべきだ。

しかし重傷者を屋外に放置とは…待て、あれらの傷は?

恐る恐る体を確認していく。

頭もついてるし、手に足も動き、声も出せている。

傷1つない健康体そのものだ。それどころか、どこか体全体が軽いような、若々しい気さえした。

「えっ?」

「…えっ…、…えっつ…、…え…?」

しばらく1人で同じ言葉を繰り返して困惑する。意味不明だった。

最悪な時にパニックを起こせば…終わりだ。某トゥームストーン分隊長もそう言っていたではないか。

落ち着け、まずは1つずつ確認していこう。

まず俺は暴走車両にひかれ、交通事故で死んだ…はずだ。

…：思い出したら腹立ってきたな。まあいい、次。

身体。重傷だったはずだが、立てるし、声も出せる。

むしろ以前より元気に感じる。そもそも、事故なんか起こってないかのようにだ。

メガネがないことにも気が付いた。しかし、視力に何の問題もなく、遠くまで見渡せている。

景色。薄暗かった空は何故か、夕焼けで明るかった。時間が巻き戻ったのか、別の地域なのか。

見た限り日本の住宅街…だと…思う。多分。

自信なさげに言ったのは、異彩を放つものがあるからだ。

普通の住居もあるが、崩壊した一部の住居。完全に崩れているものの、壁が抉れているもの。

そして…

「ハンヴィー…だよな…」

武装こそ搭載してないものの、日本の公道には少し大きすぎる軍用ジープ。

米軍をはじめ、欧州や中東軍に採用されているこの車両は、日本に存在するには少々不自然だ。

自衛隊ならば高機動車だろうし、俺の地元にも米軍基地はない。

どうしてこんな所に…。

それだけならまだしも、黒煙を出して大破しているのだ。  
なるほど、全く分からん。



…ははーん、夢だな！

導き出せる可能性は1つ、夢だ。

正直、それ以外にこの意味不明な状況に説明なんかできない。

きつと現実では手術か何かしてて、俺は麻酔で眠っているんだろう。きつとそうだ。

むしろ目が覚めて、医師からあなたは9年間の昏睡状態だったので、なんて言われるほうが心配だ。

今更ながら自分の一人称が俺になってしまっていることに気が付いた。

社会人になる時に直したはずの一人称。

冷静なら私なのだが、つい興奮したり気持ちが高ぶると俺になってしまう。

それほど動揺しているのかもしれない。

とりあえず、今は目の前のハンヴィーを覗こうか迷っていた。

だが、大破しているということは、戦闘があったのかもしれない。

もしかしたら車内に遺体が、とかは流石にもうメンタルが持ちそうもないので、そこを躊躇しておろおろ立ち往生している。

…いや、もういいか…どうせ夢だし…。

むしろ、戦闘があったなら、自分もここから逃げるべきだ。

投げやりな意思と勇気で車内を確認したが、恐れていた惨たらしい状況は無かった。

「はあー…っ」

安堵。つい無意識にため息がでた。

中々にリアルで嫌な夢だ、さっさと覚めてほしい。

早速ドアを開け、じっくりと車内を確認していく。

座席やその下に空薬莢が散らばっている。金色のように輝くそれ

らは、ここで銃火器を使った戦闘があったことを表していた。

車は大破してるから運転は無理だな。軍用無線機も使えなさそう  
だ。そもそも使い方を知らないが。

こういう車両はドアやボンネットとか、どこかに何かしらの軍マー  
クや所属部隊表記があるはず。

ドアにそれらしきマークがあったが、黒ずんでいてよく見えなかつ  
た。余程の激戦だったのだろうか。

後部座席に気になるものを見つけたので自分のほうへと引き寄せ  
る。ずっしりとした重さが腕に押し掛かるが、気にせず引つ張り出し  
た。

誰かの私物だろうか。　〃私立　古流高校〃　とだけ書かれたそ  
れは、トランクケース…にしては大きすぎる。

もしや、ガンケースでは。

「ははは、まさかな……」

自分の浅はかな発想に笑いながら開けると、そのままかであった。

「えっ」

本日何度目かは分からないが、再び同じ声を出して困惑してしま  
う。

あるのだ。目の前に。銃が。

正確には入っていた、か。

小型ながらも美しく、無駄のないデザインに、緩やかな形をしたマ  
ガジン。

自分の記憶が正しければ、ドイツで開発・製造されたUMP9…の  
ハズだ。

何でこの国に銃が。ガンケースに書いてある高校って何のことだ。  
何かの冗談なのか。

狼狽しながらも、恐る恐る、慎重に銃を手取る。見た目とは裏腹に、ずつしりとした重みが伝わってきた。偽物遊戯銃ではなく、まるで本物実銃のようだ。

使い方なんて全く分からない。が、崩壊した市街地と大破した軍車両が不安を煽ってくるのだ。

これを持っていろ、と。

まるで本当に銃を持っているような重量感で、俺はより困惑してしまふ。

本当は、これは現実なんじゃないか……？

…いや、今はこれを考えたくない。

今の自分にはこれは夢である、という言い訳が必要だった。そうでもしないと錯乱状態になってしまいそうだ。…こんな意味不明な状況にいるのだから。

とりあえず、ここから離れよう。

ずっと思考しているより、何も考えず動いていたほうがいいのかもしれない。

ここがどこなのか、どこへ向かえばいいのか。

この市街地が無残な姿に変わったのは災害によるものか、または戦争のせいだとしても、ここに留まる人はそう居ないだろう。

まだ無事な建物が多そうな方向へ歩いていく。

建物があれば、人が居るはずだ。道理である。その内、避難所、駐屯地…まあ、どこかに出るだろう。

・  
・  
・

そんな希望的観測にすぎり、慣れない銃を持って歩き続けてから1時間。

…疲れた。

肉体的にも、精神的にキツイ。疲労が溜まってきた。息を切らながら、ゆっくりと壁際に腰を下ろす。

崩壊した建物は少なくなっているし、明らかに人口密集地らしき地域に近づいているはずなんだが、まだ人影すらない。

方向を間違えたか、今から引き返すか…

自分の判断を後悔し、新しい行動予定を立て直していると、唐突に近くで音が響いた。

パキンツ、と小さくガラスが潰れる音。

その異音を聞いた自分は驚愕し、小さく体が震えた。

銃を持っていた手に力がこもる。

まだ継続して音が鳴り響いている。移動してる…というより、こちらに向かって来ているようだ。

遂に影が見え、建物の陰から姿を現したそれは、残念ながら人ではなかった。

「…」

犬：なのだろうか。いや、犬：っぽい何か…。

どう見ても犬の形なんだが、私の知っている犬とは全く違う。

真っ黒い体に、まるでSFスーツのような存在感がある赤いラインが刻まれていて。

顔もあるみたいだが、デカすぎる凶悪的な牙。口らしき器官の中に、緑で2つの目のようなものがある。

しつぽはまるで人間の背骨をそのまま持ってきて、赤く塗った不気味さ。

…率直な感想を言わせてもらおうと、全くかわいくない。むしろキモいまである。

これがこの世界での標準的な犬、なのだろうか？

一目見ただけで忌避感を覚える。悪いがこいつと友達になるのは

無理だ。他をあたつてくれ。

それともそういう世界観なのだろうか。核戦争で突然変異して…  
みたいな。

荒れ果てた大地と崩壊した市街地で、人間と犬のパートナー…うん、王道じゃないか。…自分が主人公役なら辞退するが…。

…なんて暢気なことを考えていると、犬っぽいやつに動きがあった。

私をしばらく眺めて、突然口の中にある緑の2つの目らしきものがギョロギョロと動いた。

同時に口から、どぼつと液体を垂れ流す。

それらの反応を見て、私は酷く嫌悪感を抱いた。

何故か分からないが、まるで今から殺す…そう言わんばかりの殺気。憎悪。敵意。そんな害意が一気に向けられた。人間としての本能が、目の前に居るこいつは危険だ、と警告していた。

動揺、吐き気。恐怖で呼吸が激しくなってきた。背中に流れた冷や汗が、べったりと服に張り付く。

いつの間にか、足は震え、手に持っている銃を “怪物” に向けていた。

頼む…そのまま何もせず、どこかへ行つてくれ。

そんな懇願も届かず、怪物は口からまるで唾液のように、液体を流し続ける。

次に怪物は頭を天に向け、電子音のような、聞き取れない耳障りな音を鳴り響かせた。まるで遠吠えのように。

それに答えるように、そろそろと怪物のお仲間が増えていく。

冗談ではない。嫌な予感がしてきた。

「おっ、おい、下がれっ！…俺は美味くないぞ！」

この状況で銃を使って攻撃しようかと思つたが、一度距離を取りた

かった。

銃口を向けながら、じりじりと後退していく。

こういう時は目を見たまま下がったほうがいいのだろうか。それは熊か、某機関の收容対象物だったか。

そんな警告も物ともせず、どんどん怪物共は近づいてきた。

どちらが早かったか。俺と怪物は走りだしていた。

もちろん俺が逃げで、怪物が追い、だ。

路地裏に入り、自分が通った後に、ごみ箱や段ボールの山を倒して少しでも妨害する。

しかし犬のようにすばしっこい怪物共には微々たる障害だったようで、容易に付いてくる。

それなら、と近くの建物に入り窓から脱出する。これらもたやすく飛び越え、ぴったり背後からの追跡に戻ってくる。

これらの妨害で少しは距離を離れた…と思いたいが、この怪物共、相当な運動神経のよさだ。

何時の間にか、腕から血が出ていた。窓から脱出した時、ガラスで痛めたようだ。

夢なんだから血が出るわけが……。

「っ、あっ……はあっ、はあ……ッ」

……いや、分かっていた。

夢なわけあるか。これは現実だ。

血も、汗も、背後に迫る殺意も。全て現実だ。

…怖い。恐怖。狼狽。

戦うのが怖い。死ぬのはもっと怖い。

ずっと受け入れるのが怖くて、ただ逃げただけなのだ。

肺はいよいよ限界まで苦しくなって、視界も安定しているとはいいにいく状況になってきた。

…交通事故で死んだ時は女子高生が看取ってくれたが、ここは孤独だ。

しかもあんな不細工な怪物を見ながら終わりたくない。死んでたまるか。

いずれ体力は切れる。持久戦になるほど怪物共のほうが有利だ。ならば、

——ここで迎え撃つしかない。

覚悟を決める。

誰も居ない大通りの真ん中で、しっかりと銃を握り、後ろを振り返る。

息を整え、銃口を奴らに向け、引き金を…

「…!?!」

無音。何度か試すも何も起こらない。

何故だ、どうなっている？

怪物どもは俺を食らいつくそうとしている。時間がない。

早く攻撃しないと。こちらがやられる！

「…そうか、安全装置か!」

急げ、急げ、急げ。もつと早く。

どこでもいい。適当にセットした安全装置は力チリ、と小さな音を鳴らし、戦う準備ができたことを知らせた。

「ツ…、うわあああああつ!!」

恐怖か、勇気か。あるいは両方か。悲痛な思いと決意を乗せた叫び

が、無人の市街地に反響する。

落ち着いて冷静に肩に銃をつけ、サイトで狙う、なんて時間も、考える余裕も無かった。

腰だめで弾をばら撒く。

パパパッ、と軽いように思えるが、しっかりと重低音の発砲音を響かせるUMP9。

訓練も実戦経験もない民間人には銃の反動を制御できず、あらぬ方向に銃弾が飛んでいく。

しかし、腰だめによる弾幕のおかげか、数体に命中していき、命中した敵：怪物は水が弾け飛ぶような、不愉快な音を立て倒れていく。見れば2、3体ほど仕留めたらしいが、まだ数体残っていた。

残った数体は、弾をばら撒いたおかげで流れ弾が命中したのか、足を負傷していたり動きが鈍い。

これなら助かるかもしれない。微かな希望が見えてきた。

順調に思えたが、車の陰から無傷の怪物。

引き金を引くが、発砲音は無かった。弾切れだ。全弾撃ち尽くした。

急いで後ろにのけぞって回避する。

「しまっ……」

言い終わる前に恐ろしいほどの衝撃を受け、俺の体は吹き飛ばされた。

まるで全力で蹴られたサッカーボールが腹にめり込むような痛み。思わずうずくまってしまう。

怪物の体当たり攻撃だった。犬のような凶体のくせに大火力である。

まともに受けていたら気絶、重症、：死、すらありえる威力だ。

意識が朦朧としているが、格闘戦に備える。

近接戦闘なんてやったことも、やり方も知らないが、銃で殴れば相



当な痛みのはずだ。

死なば諸共。どうせ死ぬなら、せめてコイツだけでも道ずれに…！  
うつ伏せから立ち上がるとうとするが、力が入らない。  
体当たりを食らった場所が痛み、情けない唸り声が漏れる。

俺が決死の覚悟を決めたところで、凜とした高い声が響いた。

「伏せろッ！」

その声と同時に、大小さまざまな銃声はその場を支配した。

一瞬にして駆逐されていく怪物。

多数の銃声がしばらく鳴り響き、最後の敵もビシヤツつと嫌な音を  
立て倒れた。

…助かったのだ。自分はまだ生きている。

ここまで長かった。

この逃走劇を生き残れたことに、涙すら出てくる。

前世では酷い運命だったが、今回ばかりは多少幸運のようだ。

とりあえず震える足と体に力を入れ、立ち上がろうとすると、ジャ  
キン、と鋭い音が響いた。

「動くな」

…今世も自分の運は最悪なのかもしれない。

## 第2話 出会い

「動くな」

ジャキン、と重々しい銃火器の音と共に、鋭い声で警告が放たれる。どうしてこうなった。

必死に怪物から逃げて、倒して、助かったと思ったら。背後から投降勧告された。

よく状況が飲み込めないが、抵抗する理由もないので、ゆつくりと銃を地面に置き、両手を見せるように挙げる。

「援護する」「了解」と短く静かなやり取りが聞こえた後、銃口を斜め下向きで保つ姿勢で、1人が接近してくる。

彼女はこちらを警戒しながら、先程の戦闘で俺が使った銃、UMP9を迅速に回収した。

よく訓練されているようだ。警察、または自衛隊のような組織なんだろう。

しかし、声からして女性だろうか。こうした任務や部隊で女性というのは珍しい。

「どうしたの？ 何か問題？」

清々しく、透き通った声。足音と共に近づいて来たのは、また女性の声だ。

重装備なのか、歩く度に兵装が存在感のある音を響かせている。

「ああ、先生。銃を所持していたので、無力化しました。校章もないので、民間人だと思います」

…なるほど。確かに、普通の民間人が銃火器持ってたら怪しいよな…。まさに銃刀法違反…。

………ん？ //先生？ //校章？  
「あら、そうだったの。 ……ごめんなさい、もう立つてもいいですよ」

聞こえてきた単語に混乱しつつ、とりあえず立ち上がる。が、振り向いた時、目の前の光景が信じられなかった。

「女…!？」

「男!？」

つい声に出してしまった。失礼だと思うが、それほど驚愕したのだ。

まず、部隊全員が女性だった。その上、とんでもなく美少女が多い。次に、彼女らは制服なのだ。戦闘服ではなくて、学校で見かけるような制服に、防弾ベストを着ている。

…何なんだ、これは？

いつの間にかサバゲーフィールドにでも迷い込んでしまったのだろうか。

先生、校章。聞こえてきた言葉が本当なら。

彼女たちは、学生なのだろうか。何故、学生が実銃を持って戦っているのか。

…全く意味が分からない。

ところで向こう側も驚いているようだが、何故だろうか。

…ああ、やはり女性が多いグループに男って、居心地が悪いですね。申し訳ない…。

というか、男の人は居ないのだろうか…まともに会話できる気がしないが、お礼だけは言わないと…。

早速、人見知りモードに入り始める私に、女子高生の1人が話しかけてきた。

暗めなブラウンのような、栗毛のような髪。軽めの前髪ぱつっん

に、ちよつと触覚があり、長めのポニーテールで、前髪にヘアピンを付けている。

白い半袖ワイシャツに、青いリボン。その上に黒いカーディガンを着ている。

腰にはウエストベルトが巻いてあり、無線機が付いていた。

両手にはAKMが握られている。

彼女も大変な美少女で、気後れしてしまう。

「これ、どこで見つけた？」

彼女が尋ねたのは、ついさつき回収されたUMP9だった。

「あつ、はい…えつと、この方向で大破したジープからです…」

「うちの間違いなきさそうね、回収班を送るわ」

おどおどしながら答える私の情けない回答の後、キリツとした顔の女性自衛官が無線で交信を始めた。この人は先程、先生と呼ばれていた人だ。

自衛隊の戦闘防弾チョッキを着込んでいるこの人は、上から下まで迷彩服。

肩にかかっているベルトが、64式小銃を吊り下げて支えていた。

白に少し黒色を加えたような、淡いグレーという落ち着いた色で、ロングヘアの髪型。

目も髪色と同じグレーだが、濁りのない綺麗な目だ。

その中で、強い意志を感じるような、しっかりとした目つきだった。

信じられないが、銃と軍用車両は、本当に高校の備品だったらしい。そういえば、ずっと気になっていたことがあるので、このまま思い切って聞いてみる。

「あ、あの、ジープの乗員って…」

「犠牲者はなし。全員無事です」

「そう、ですか…よかった」

誰かの遺品を勝手に使っていました、なんてことになってないか心配だったのだ。

そもそも学校の備品扱いで、私物という訳でもなかったが。

いずれにしても、犠牲者は居ないと聞いて安心した。

「…あなた、大丈夫ですか？ どこか負傷を？」

改めて自分の姿を見ると、ボロボロだった。スーツはところどころ破け、擦り切れた布のようだ。

ワイシャツには、右腕の怪我のせいで血がついている。

…それにしてもこのスーツ、こんなに大きかっただろうか？

袖口から少ししか手が出てないので、あざとい仕草みたいになっている。男のこの仕草とか、誰が得するんだ。

「随分と敵陣後方から突破して来たんですね、銃はどこで訓練を？」

「い、いえ……初めて、です……」

「初めてでUMP9を…!？」

私の発言を聞いて、女性自衛官は驚いた後、しばし考え込んでしまった。

「…悪かったな」

どうしていいか分からず、挙動不審になっている私に、ポニーテールの美少女が再び話しかけてくる。

突然の謝罪に少し戸惑う。

「銃を持った奴って何をしでかすか…たまに危険な奴も居るんだ。疑って悪かった」

先程の無力化についての謝罪だった。

あの一連の行動は自分でも必要だったと思うし、彼女は仕事をしただけなので全く気にする必要はない。

「い、いえいえ、そんな…。こちらこそ助けて頂き、ありがとうございます。ました」

やっとお礼が言えた。少し達成感。

顔を上げて彼女を見ると、真っ赤に赤面して顔を逸らしていた。

「き、ききき、気にすんな！ これが任務つか、当たり前のことっつうか…!」

「彼女、素直に感謝されたりするのが苦手なんです」

女性自衛官が横から補足してくれた。  
なるほど、初々しい人なんだな。

「豊崎 和花です」

背筋を伸ばし、堂々と、凜とした姿勢の女性自衛官。

「…伽鳥 杏奈だ」

少し恥ずかしそうに、視線を泳がせながら。ポニーテールの女子高生。

美少女2人と出会い、自己紹介を受けた。

わ、私ごときがこんな方々と握手してよろしいのでしょうか…？

「それで、あなたは…？」

…あなたは、ってこれ、私も自己紹介しろってことですよ。

…  
…  
…

ハンヴィー車内。

私がこの世界で目覚めた時、初めて目にした軍用車両だ。

もちろん、あの大破した車両に乗っている訳ではない。それは今頃、回収班という人たちが何とかしているんだろう。

今搭乘しているこれは、彼女らが移動に使用した軍用ジープで、今も兵員輸送という役割を果たしている。

荷台や後部座席に大量の武器、弾薬があるので、私は助手席に座らせてもらっている。

私立 古流高校の校章が塗装されているこの車両は、屋根やドアを外したオープントップタイプ。

窓もドアもないので、風が直に当たる。寒い。

結局、名前は言わなかった。

…いや、言えなかった。

しばらくこの世界を見ていて思ったのは、ここは並行世界、パラレルワールドなのではないか、と。

元住んでいた世界とは違う、もう1つの世界である。

恐らくこの世界に私は居ない。そもそも存在すらしてなかっただろう。

確信はできないし、証拠もないが、そんな気がした。

つまり今、私は身元不明者だ。

名前くらい言ってもバレないと思うが、嘘はつきたくなかった。

しかし、自分の事情を話すのも気が引けた。

「交通事故で死んだと思ったら、何故かこの世界に居ました。」

正直に事情を説明しても、何言っただこいつ…みたいな反応になるのは簡単に予想できる。

嘘はつきたくない。でも事情は話したくない。

で、私が導き出した最も最適な回答がこれだ。

記憶喪失。

こういつた戦闘とか肉体的、精神的に強い衝撃を経験した場合、記憶喪失になってしまう…なんてケースは珍しくない。

ちよつと伏し目がちで、「何も覚えてないんです」…これで違和感なくやり過ごせている。

これはこれで記憶喪失、という嘘になるんだろう。

しかし、この世界に「誕生」したと仮定するなら。あの戦闘地域での覚醒が、この世界での私の誕生だ。

流石に説明できそうもない。記憶喪失を落としどころとして、許してほしい。

ちなみに今、車両は戦闘地域を抜け、安全な市街地に戻っている。後部座席と荷台にいる女子高生たちを高校で降ろした後、私を自衛

隊病院に連れて行ってくれるらしい。

「色々とぐ迷惑をかけて、すみません」と再度謝ると、運転席に居る豊崎さんは「これが我々の仕事なので、気にしないで下さい」と真面目な顔で返してくれた。

しばらく進むと、人混みと警官隊が見えてきた。機動隊や自衛隊も居る。

非常線、というやつか。

戦闘地域への道を封鎖しているのだ。

報道関係者や野次馬を交通整理し、民間車両を追い返している。どの時代でも公務員というのは大変らしい。

上空では、けたたましい音と共に、戦闘ヘリ小隊が編隊を組んで飛んでいく。

「あの…いつもこんな感じなんですか？」

これらの物々しい雰囲気を見て、つい聞いてしまう。

豊崎さんはしばらく考えた後、静かに説明してくれた。

「ここまで大規模な攻撃は久しぶりですね…いつもはもつと静かです。」

各地の部隊が支援に来てくれたので、そろそろ掃討戦の段階に入っただと思います」

「ネストシードを見落とされたのも痛かった」

後部座席の伽鳥さんも会話に加わる。

ネストシードって何だ。

…それにしても、大規模な攻撃”とは…。

やはり、この国は戦争状態だったのか。あの犬怪物も改造され、クローン製造された生物兵器だったりするのか。

「人的損害は最小だったのは不幸中の幸い、つてどこかしら…数か月もすれば、あの地域も元通りになると思います」

もう少し色々と聞きたかったが、高校に着いてしまったようだ。



後部座席と荷台から女子高生たちがぞろぞろと下車した。

よいしょ、とかわいらしい掛け声とは正反対に、重そうな武器や弾薬を降ろしていく。

それらの作業が終わった時、豊崎さんが思い出したように伽鳥さんへ声を掛けた。

「あ、伽鳥さん。課題、忘れないように」

「うっ…わーかってますよ、お疲れ様です」

「はい、お疲れ様」

普通の学校のようなやり取りをした後、再び車両が走り出す。

先生というのは本当だったわけだ。あの子たちが高校生だったのも。

・  
・  
・

豊崎さんに案内され、自衛隊病院で治療を受ける。

ガラスで切って怪我した右腕には、消毒と簡単な包帯をされた。

怪物に体当たりされた箇所も特に問題なく、体内器官に損傷もないので、じきに痛みが引くそうだ。

軽傷だった私の診断はすぐに終わった。

周りを見渡せば、私と同じく怪我をした民間人や、負傷した軍人が運ばれてくる。

しかし、ここでも奇妙な光景を目にしていた。

ほとんどの人が、女性なのだ。

怪我人も、軍人も、医者も。男性も少し居るが、女性に対して圧倒的に少なく感じる。

しかも全員が美男美女って何なんだ。ここ本当に軍病院か。顔面偏差値が高すぎる。キャバクラとかホストクラブとかじゃないよな。

とりあえず、落ち着いて怪我の様子でも見てみるか…。と鏡の前に立ってみるが、平静さを保つどころか、狼狽えることになってしまった。

「何…だ、これは…?!」

思わず鏡に手をつき、無意識に声を出して困惑した。いつもの見慣れた、仕事に疲れ切った老け顔ではない。

鏡に映っているのは、とんでもない好青年だった。

何いきなりナルシスト発言してんだこいつ…と自分でも思ったが、目の前の鏡に映っている顔には、それほどの衝撃があった。

中性的で、穏やかで優しそうな顔つき。

険しい顔をすればしっかりと男らしい表情になり、佇んでいれば美少女のように見える。

まるで恋愛ゲームの主人公のような、爽やかな青年がそこに居た。

スーツの大きさが合わなくなったことや、やけに体が軽く感じたのは――

「若返った…のか…?!」

正確には生き返った、…のほうが正しいのだろうか？

馬鹿な…ありえない。

現実的に考えられない、と否定的に切り捨てたかったが…。

この短時間で、ここまで、非現実的なことを体験し続けている。

もはや何が起こってもおかしくない。こういったこともあるんだろう。…きつと。多分。恐らく。

交通事故で死んで、この顔と体で、生き返った。

そういうことではないだろうか。それくらいしか思いつかない。

驚きのあまり、顔から汗が流れている。しばらく鏡をぼんやりと眺めて、呆けることしかできなかつた。

一人で考え込んでいると、豊崎さんが私に手招きしている。

彼女に連れられ、建物の外に出た。

あえて人通りが少ない建物の外で話すとは、余程重要な話なのか。

何やら真剣な表情だつた。

一体何を言われるのか。緊張して体が強張る。

夕焼けと寒い冬風を浴びながら、彼女の言葉を待った。

唐突に告げられた言葉で、再び私は驚愕してしまう。

「あなた、指定防衛校に入りませんか？」

「…えっ」

### 第3話 決意

肌寒い冬風と、日没が近いことを知らせる夕焼けを浴びながら、私と豊崎和花は互いに向かい合っていた。

「あなた、指定防衛校に入りませんか？」

「…えっ」

磨けば光る。そんな勘を感じたのか、

先生、教官という立場にいる指導者の豊崎さんは、私を指定防衛校に勧誘していた。

「…我々が到着するまで獣型XX、K9と約5分交戦。訓練なしの初実戦でUMP9を射撃、数体撃破。」

…そう簡単にできることじゃありません」

真剣な表情で、淡々と説明される。

その雰囲気から、彼女が本気であることが伝わった。

いきなりそんな事を言われても混乱する。私はただ困惑するしかなかった。

「で、でも私、記憶喪失で身元不明者ですし…」

「大丈夫。私が何とかします。」

…あなたの力で、1人でも多くの人を救ってみませんか」

そこまでして深刻な人的資源不足なのだろうか。私なんか何の役にも立てないと思うんだが…。

…指定、防衛校。

恐らく、戦うことになるんだろう。あんな凶悪な怪物と。

また、あの恐怖を目の前で味わうのか。自分に耐えられるだろうか。

しばらく黙り込んで、悩んだ挙句——

結局、出てきたのは保留の言葉だった。

「…すみません、少し…考えさせてください」

「…そう…、ですか…」

彼女は少し残念そうに苦い表情をして、「また気が変わったら来てくださいね」と付け加えた。

そんな言葉に送られ、私は逃げるように駐屯地を後にした。

指定防衛校に入れば、身元も生活も保障されるという。かなりいい条件だと思うし、今の私の状況なら願ったり叶ったりだろう。

しかし直ぐに、はい、とは言えなかった。

やはり、怖いのだ。

昨日まで銃なんて人生で一度も見ず、仕事だけして平和な国で、のほほんと過ごしてきた民間人が、即座に兵士になれるか。否。

あの戦場で生き残れたのも、運が良かっただけ。

自分が生きるため、必死だった。

自分のためじゃなく、他人のために、戦えるだろうか。

覚悟も、心構えも違う。

そんな中途半端な気持ちでは、自分だけでなく周りにも迷惑だ。

そもそも、私はこの世界のことを何も知らない。ここはどんなところで、どんな状況なんだろう。

…そうだ、情報が必要だ。

それから判断を下しても遅くはない。

街中にある案内地図を見つけ、情報収集ができそうな場所を探す。現在地から近くに図書館があるようだ。そこに向かうことにした。

ガラス張りで外の光が差し込み、丁寧に手入れされ、テラスのような外席まである御洒落な図書館。

見た目と同じく、中も立派だ。入館すると、天井まで届きそうな本棚がずつしりと並んでいるのが見えた。

何でもいい。歴史、史料、現代社会、新聞、雑誌。手当たり次第に持ち、全て頭に叩き込む作業に入る。

・  
・  
・

数時間後。

私は疲れた目を手で抑え、椅子に浅く腰掛け、ため息をついた。

完全に把握したわけではないが、この世界は…お世辞にも素晴らしい世界とは言い難い。

まず、この世界の男女比について。

この世界も最初は男が多く、私の元居た世界と同じ感じだった。しかし、世界大戦が勃発。

まず第一次世界大戦が始まる。各国はただ戦争に勝つ…それだけの目的のため、朝から晩まで戦時体制で、必死に新技術の研究を続けた。

ライフル。機関銃。野砲。塹壕戦。毒ガス。戦車。航空機。

「戦時の1年は平時の10年」という言葉通り、国が総力を挙げ、技術を始め、あらゆる分野に総力戦をつぎ込んだ大戦は戦火を増していった。

新兵器だけでなく、戦い方…、戦術・戦法も発展し、強化され、更新されていった。

きらびやかな服に、勇ましい音楽と、華の騎兵隊の時代が終わった。戦場のロマン、なんてものはない。

ただあるのは、死のみとなった。

簡単に、短時間で大量の兵士が死ぬ戦場の時代になったのだ。

ここまでは私が元居た世界、前世と大差ない。

だが、この世界では兵士が——正確には、男が死にすぎた。”

この頃から男女比が変わり、兵士になるのは女性……というのが主流になっていく。

第二次世界大戦でも、男性もそれなりに前線に動員されているが、女性に比べてかなり少ない。

この二度目の大戦で、全世界の男性が更に減少。

人類滅亡の危機……とは言いすぎだが、流石に偏りすぎた男女比……この頃には女男比と呼ばれているほど、減少した男性を保護する政策が、世界各地の政府で採用された。

軍では多くの男性兵士の戦死を避けるため、後方への移動が推奨された。

産めよ育てよ、のスローガンの元に人口回復の試みが、現在も続いているらしい。

第二次世界大戦が終わると、この頃には兵士だけでなく、政府、高官、上から下までほぼ女性が着任するようになった。

立場が、役割が入れ替わった。

あべこべの始まりである。

家で家庭を守るのは、男性の仕事。外で国家のため戦うのは、女性の仕事。

2つの大戦で擦り切れた男性は、どんどん衰えて。戦地に出て勇ましく戦う女性は、逞しくなった。

男女の価値観や立場は逆転しているが、それはそれとして、最初からあべこべ世界だった訳ではないので、元の価値観もごくわずか……だが、残っている。

基本的に女性は淑やかなのが美德とされているし、むやみに肌を晒すべきではない。

しかし男性も、時代が経つにつれ、恋愛には奥手な人間が多くなっ

てしまった。

例外な人間も居るだろうが。

：こうしてお互いに消極的な人が多いため、人口回復政策は短期間で目覚ましい成果を挙げた：とは言えなかった。

何もないよりかは、あつたほうがはるかにマシなので、現状じわじわと地味に回復させているんだろう。

ここまですべて色々末期だが、ここから更に問題だ。

20世紀末。冷戦終結。

帝国主義の崩壊、世界経済の発展。ドイツ再統一。

ソビエト連邦が崩壊し、ロシア連邦に生まれ変わった頃。

ここから始まったのは平和でも、対テロ戦争でもない。

ユーラシア中央部を始めとして世界各地に現れた “ネスト”

より、未知の敵 “XXIIイクシス” が出現。

それらは、国家、政体、志向に関係なく、全世界を襲った。

人類は新たな脅威に、滅亡の危機に直面したのだ。

9. 11。アメリカ合衆国がイクシスによって大打撃を受けた。

忌々しい、悲惨な日として記録されている。

軍人だけでなく、警官、消防、救急、更に民間人まで——突然、未

知なる敵から攻撃を受けた。：多数の人々が、多くのものを失った。

衝撃的な事件であった。

：第三次大戦が開戦。

相手は人間ではなく、全く未知の敵。

イクシスによる緒戦の電撃的奇襲と物量、未知の能力により、一時は危機的な状況に立たされる人類。

だが、流石というべきか。二度も世界大戦を経験しているこの惑星<sup>地球</sup>は、緒戦の敗北や失敗を経験としたのち、ありとあらゆる武器、兵器、戦術を用いて効果的に反撃した。

各国軍の奮戦と国連軍によって、辛うじて防衛線を確立。封じ込め



に成功しているらしい。

冷戦影響が残った敵対国家同士は、あわよくばあの敵国滅びないかな…とか思ってたそうだが、そんな考えを持つ余裕も無くなるほど、イクシスは快進撃を続けた。

今まで争っていた人類が、強大な敵が現れたおかげで一致団結している。皮肉なことだ。

…ともあれ、この戦争は普通の人々に、戦争意識の変化を——大きくもたらした。

ベトナム戦争では、報道と技術の進化によって、見ることができるとなつた。

戦場報道。

新聞で見る戦場が、映像で見る戦場が変わっただけで、社会に大きな衝撃と影響を与えた。

では、「ネスト」はどうか。

我々の意志に関係なく、目の前に、生身の敵が。

敵意を持つ、未知なる存在が出現するのだ。衝撃どころの話ではない。

各国に現れた無数の小規模「ネスト」による同時多発的・持続的な襲撃により、人々は未知の敵との、恒常的な戦闘を強いられることになった。

戦争に対する当事者性を、嫌でも強く認識した。日常のすぐそばに戦争が存在するのだ。

そして現在。

この国：日本には、民間防衛の一助として設立された「指定防衛高等学校」が設置され、各地の防衛戦闘で食い止めている。

簡単にまとめると、男女比はかなり偏ってて人口的に危ないし、価値観も逆転している。

女性は恥じらいもあるものの積極的で、男性は数が少なくせに消

極的だ。

未知の敵、イクシスとやらは、ネストとかいうのを使って、世界中どこでも展開してゲリラ戦闘を仕掛けてくる。

…世紀末だ。

「はあ……」

再び大きなため息。

どこを見ても美男美女とか、このとんでもない世界状況を見て、ここは二次元だと察することができた。…できたが、

「どうしてもっと平和な世界じゃないんだ…」

つい愚痴を零すように呟く。

二次元に転生できたのは嬉しいし、喜ぶべきなんだろう。

だが、だが！

もう少し穏やかな世界で目覚めたかった。

静かな喫茶店で毎日びよんびよん過ごすとか、アイドルのプロデューサーとか、命の危険がない世界に行きたかったものだ。

この先の未来を想像して、恐怖した。

人口の低下、各組織での人員不足。長期間の戦争で、消耗していく各国。

いずれ、武器も弾薬も、資源も、人的資源すらも無くなるかもしれない。

この現実を直視して、怖くなった。

ただ、こうして逃げている事が怖い。

戦うのはもっと怖いかもしれない。それでも、戦っていたい。

どうせ死ぬなら、意味ある死にしたいのだ。

民間人として逃げ回って、崩壊した市街地で倒れ、無数の死体に加わるより…朽ち果て、誰の記憶にも残らずに死ぬよりは――

誰かの前に立ち、戦って終えたい。

『あなたの力で、1人でも多くの人を救ってみませんか』

豊崎さんの言葉が、脳内で鮮明に思い出された。

少しだけ、私の微力が役に立つなら——  
世界を救うのも、国を救うなんてのは無理だし、夢物語だ。  
でも自分が戦って、1人でも救えるなら。

——この世界で、私は銃を取ろう。

なけなしの勇気を振り絞り、決意を固めた。

1人で黙々と作業したことで、多少は気持ちの整理がついた。  
そうと決まれば、善は急げ。

早速、この決意を伝えに行こうと思ったが、既に外は暗くなっていて、図書館は閉館の準備をしていた。

…今日は無理そうだな。

せっかく決意したのに、締まらない。

ずっとここに居座っても職員の人に迷惑なので、さつさと退館する。

すっかり手持ち無沙汰になってしまった私は、ふらふらと街を歩いていた。

仮に入隊…いや、入学か。入学するとしたら、この街。この日常が、戦場になるのだ。

土地勘を掴んでおくのも必要だろう。

普通の住居、高層ビル、商店街、交番、公園…

ちよつと女性が多いことを除けば、一般的な、変哲のない日本の都市。この国が戦争しているなんて、実感がわかなかつた。

何も考えず歩いていると、冷たい夜風が私を叩きつけた。12月の夜はとても冷える。

夜風から逃げるように近くの駅に入る。少し休みたくて、ベンチに腰を下ろした。

「はあ…」

今日何回目かのため息をついてしまう。いつの日かと同じく、それは真つ白な白息として消えていった。

今日か、昨日か。とにかく短時間で色んなことがあった。ありすぎた。

とつくに私の脳内処理能力は限界を超えているのだ。これ以上対応できない。

この世界で経験したこと、出会った人、これからの行動。小難しいことを考えているうちに、頭はうつらうつら、と舟をこぐ。

…眠い。

疲労と睡魔で何も考えられなくなった私は、ゆっくりとベンチに横になっていく。

コツン、と小さな音をベンチで立て、完全に横になった私は、深い眠りへと意識を手放した。

・  
・  
・

「……………」

ゆさゆさと体が揺れる。いや、正確には誰かが私を揺すっているよ  
うだ。

何だろうか。

私は眠いのだ。放っておいてほしい。

「……………起きて」

物静かな声と共に体を揺らされ、意識がゆっくりと覚醒していく。

…

——しまった。駅で寝て…、駅寝しまったのだ。

そう思い出すと、一気に意識が目覚めた。公の場で惰眠を貪ってしまった、何たる失態。

直ぐに体を起こし、自分の非を謝罪する。

「す、すみません！ 私…」

「こんなところで寝ないで」

ぴしやりと冷たく言われ、思わずたじろぐ。

いや、彼女が正しいのだ。ド正論なのだ。甘んじて受け入れよう。

とりあえず相手の顔を見て反省しようと、顔を上げる。が、言葉を失ってしまった。

水色に透明さが合わさったような、綺麗な白色のセミショート。

前髪が少し重めで毛先が少し丸まっている、瞳が大きい黒目がちな感じの子。

肌はとても色白く、黒っぽいライトブルーの目は見ているだけで引き込まれそうだ。

かわいいというより、美しい。どこか神秘的な雰囲気すらある彼女が、目の前に立っていた。

ピンク色のかわいらしいワイシャツにリボン、そしてそれらの上には戦闘ベスト。

手にはMP7を持っていた。

…どうやら、彼女も防衛校の生徒らしい。

「イクシスはいつどこに出てもおかしくない。ちゃんと家に帰って」  
それだけ警告すると、さっと彼女は立ち上がって行ってしまふ。

「あつ、あの…！ あなたは…!?!」

「DDA城宗、特一―A 椎名<sup>しいな</sup>」

ようやく言えた質問に、彼女はほつりと簡潔に一言だけ返すと、今度こそ立ち去ってしまった。

表情こそ険しく、怒っていたようだが、わざわざ私なんかを心配してくれたのだ。申し訳ない。

…それにしても、この季節にワイシャツとは。寒くないのだろうか。

とりあえず立とうとすると、パサリ、と布が擦れる音がした。

アースブラウンの色をした上品そうなブレザーが、私の上半身に掛けられていた。

袖の部分には「リトルアーモリー」と、防衛校生徒の表記が書いてある。

これはつまり、…彼女の上着か。

…心配してくれただけでなく、上着まで掛けてくれるとか何なの？  
優しすぎない？ ちよつと泣きそう。

とてもありがたいし、誰かから厚意を受けるということに感激していたが。

「…どうやって返せばいいんだろう」

まず彼女がどこの所属か分からないし、言っていたDDAという単語が意味不明だ。

寝起きで思考能力が低下し、考えることを放棄した自分は、何となくブレザーを抱いてみる。

…あつたかい。

あと凄くいい匂いがする。

人生で初めて経験する香りなので、例えようがないが…不快感は全く無く、むしろ心が安らいでいく気さえした。

(…何をしているんだ、私は…)

ついついこんな行動をしてしまった自分に驚愕しつつ、気まずさを

覚える。

というかこれアウトなのは？ 事案なのは…？

男が女子高生のブレザーを抱きしめているとか、変態野郎どころの話ではない。

お、終わった。すぐに駅員と警官が駆け付け、周りから嫌悪感を含んだ目で見られるのだろう。

慌てて周りを見渡すと、特にこれといって恐れていた事態は無かった。

行き来する会社員や、普通の学生に、ライフルを持った防衛校の学生。この世界では、至って普通の通勤光景だ。

…そう、か。

ここは男女の価値観が前世と少しだけ、ズレているんだった。

つまり私の今の光景は、元の世界に当てはめると…、

引っ込み思案の大人しい子が、異性の制服を抱きしめていた。という感じになるのでは…？

…ありではないだろうか。

周りから見ても青春してるなあ、ぐらいにしか思われないという訳だ。

…いやいや。違う、こんな事をしている場合ではなかった。

ふと時計を見ると、朝8時頃になろうとしている。

このブレザーは…ありがたく羽織らせてもらおう。戦闘でボロボロになった、今の服を隠したかった。あと寒かった。

早速、昨日の駐屯地に行つて決意を伝えに行く。

・  
・

…余談だが、ここで彼の姿を見て、複数の女子高生から「城宗女子高の制服だよね」「かわいい、彼女に着せてもらったのかな」「女子高の制服を異性が着るのって結構アリかも」なんて、ささやかに黄色い

歓声が上がっていた。

きつと彼が聞いていたら、改めてこの世界に転生できた事を感謝するだろう。

しかし悲しいことに、彼は既に新しい決意と共に走り出していたため、これを聞くことはなかった。運の悪い男である。

・  
・  
・

しくじったなあ。

そんな後悔と共に、私は駐屯地の前で佇んでいた。

駐屯地は立派な軍施設なのだ。軍人でもない民間人が入れるわけがない。

タイミングよく豊崎さん、出て来てくれないかなあ。

どうしようか、右へ左へ立ち往生。なるほどこれは…控えめに言つて不審者…。

「どうかしましたか?」

久々に聞くような、低い声。

振り返ってみると、この世界では珍しい男の人。

冬服制服を着て、逞しい、しっかりとした肉体を持つ、男性自衛官だった。

制服の階級章は、金色の下地に三本の線、そこから一本の線が三角のような形で、その上には桜が記されている。それは、彼が陸曹長という階級であることを示していた。

「あつ、もしかして自衛隊に興味あります!?!」

!?

こちらが何が言う前に、既に彼はマシンガントークのように自衛隊の広報を始めている。



やりがいのある仕事、とか。国家公務員だから安定、とか。

「ちゃんと休めるので、普通の会社と変わりません！」

(休暇申請が通れば)休めますね…。

「資格や免許も沢山取れますよ！」

「はキヤタピラ車に限る。特車に限る。とか書いてあるパターンでは…？」

特車、…つまり戦車である。

戦車の免許が活かせる仕事って何だ。軍か。

Private Military Company  
P M C (民間軍事会社)か。

まあ、普通の民間企業で使える資格もあるんだろう。…多分。

「あつ、申し遅れました。私こういう者です…」

「ああつ、すみません…」

急に名刺を出され、お互いに頭を下げる。こいつら仕草が完全に社会人営業マンのそれである。

条件反射のように、こちらも胸ポケットから名刺を出そうとするが、中には何も無く空虚であった。そもそも、この世界では自分の肩書など無かった。

とりあえず、両手で相手の名刺を受け取る。

和<sup>わだ</sup>田<sup>だ</sup> 浩<sup>こう</sup>一<sup>いち</sup>郎<sup>ろう</sup>。

それが彼の名前だ。案の定というか、広報官だった。

勧誘は嬉しいが、ここで時間を使う暇はない。私は豊崎さんに会いたいのだ。しかし、駐屯地にはどう入ればいいのか。

…いや、目の前に居る彼に頼んでみるか。

もしかしたら、もしかしたら案内してくれる、かも…しれない。駄目で元々。言うだけならタダだ。

「あ、あのっ」

「自衛隊入る気になりました!？」

「は、はい——って、そうじゃなくて…! 豊崎さん、に会いたいんですが…!」

それを聞いた彼は、ぽかんと一拍子おいて、気まずそうな顔になる。

「あはは、私の広報は一足遅かったみたいですね……」

ちよつと愚痴を零した後。ついて来てください、と言われ彼と共に駐屯地に入っていく。

ありがたい……。案外何とかなるものである。

昨日に比べ、ある程度は落ち着いた雰囲気になっている駐屯地。

エンジンを始動させているへりはないし、担架で負傷者が運ばれてくることもない。

数台の軍用車両が行き来しているくらいだ。

駐屯地の景色を眺めていると突然、案内人である和田さんが立ち止まった。

彼は、目の前の人物に敬礼した後、時間があるかどうかを尋ねた。相手から承諾の声が聞こえる。

そのやり取りを終え、彼は私に振り返り、前に出るよう促した。

視界に入ったのは、豊崎さんだった。

2人に一礼し、前が出る。

「あつ、あ、あの……、そのつ……」

いざこの時になると、緊張して言葉が上手く出ない。

今更戻って来て何を言うか。

そんな資格があるのか。

一度逃げ出したくせに。

悲観的な言葉が、脳内を支配する。

「わ、私、……わたし、は……」

違う。

言わなければならないのだ。

この世界での、決意を。

「私も、戦います……!!」

ようやく言えた、私の決意。

豊崎さんは目を見開いて驚いた後、朗らかな満面の笑みになった。「よく決心してくれました」

後ろに居る和田さんにも「おおつ、よく言った少年！」と肩をバシバシ叩かれる。痛いんで止めてくれませんか…。

「それじゃ、早速始めましょうか！」

机を並べた、静かな会議室。

会議室といっても、ここに居るのは私と豊崎さんだけだ。

ほぼ今日1日を使い切った戦い…、身元保証の手続きを終えた私は、疲労で椅子にぐったりと浅く座っていた。

指定防衛高等学校は、中等教育を受けたものが任意で入学できる。その為、身元不明者の私はまず小、中学校での卒業証明書が必要だ。小学校6年生、中学校3年生の学力検査をパスする必要がある。

私は天才ではないが、それなりの学力は維持している。そもそもこれらの試験なんて、前世で経験している事なのだ。

古い記憶を呼び起こしつつ、至って普通の成績でクリアした。

小、中等教育試験を通過すると、古流高校の試験に入る。高校受験みたいなものだ。

これらも終え、無事に学力試験に合格すると、後は体力測定だとか簡単なものになる。

もう一安心だ、と言いたかったが。

問題は個人情報だ。流石に名無しでは受諾されない。

今まで使ってきた名前でも良かったが、前世との関わりと未練をきっぱり断ち切りたかった。

この世界で後悔しないように生きる。そう決めたのだ。ふと、ある名前を思いついたので、とりあえず書いてみる。

「…」

何となく書いたその名前は、妙にしつくりきた。  
これが私の名前だ、と言わんばかりに。

一向に進まなかつた私の書類作成が終わっている事に気が付き、書類の確認作業に入る豊崎さん。

「…これが、あなたの…名前?」

「…はい。水本…、水本 要です」

まるで自分に言い聞かせるように、新しい自分になるために。  
小さく、新しい名前を復唱した。

「それじゃあ…水本さん。改めて宜しくお願いね」

「はい、ごちうこそ宜しく願います」

ようやくお互いの名前を交え、ちゃんとした自己紹介をする。  
残りは豊崎さんと和田さんが手続きしてくれるらしい。

「あと、これ」

そう言われ、手渡されたのは何かの鍵だった。

「何です、これ?」

「あなたの自宅よ」

「自宅って…、…ええ!?!」

そんな、受け取れませんと遠慮する。

しかし彼女曰く、人口低下で空き住宅があること。また防衛校の付近で戦闘に巻き込まれることを恐れ、移住する者も居るらしい。

寧ろ防衛校の付近のほうが安全だと思っただが…個人の心理的な問題か。

結局、これも防衛校による各種社会保障の優遇措置の1つだから、と押し切られてしまった。

確かに、誰にも使われず朽ち果てるよりかは、誰かが使ったほうがいいのかもれない。

・・・

・  
・

地図を当てに、新しい自分の生活の本拠を目指す。

防衛高校近くに立つ、都市部では至って普通の、大型の集合住宅だ。いわゆるマンション、というやつだろうか。

自分に宛がわれた部屋に入り、室内を見渡した。

電気のスイッチを入れると、真つ暗な部屋が照らされていく。ベット、キッチンと冷蔵庫、バスルーム、洗濯機。

必要最低限の物は揃っているようだ。全部新品なのか、綺麗な状態で、中には値札が付いたままの物もある。

シャワーは：明日の朝でいい。その時に服と、借りたブレザーも洗濯しよう。

まともに休息を取っていなかった私は、流れるようにベットで横になつた。

何か大きな事をした訳でも、誰かを救った訳でもない。

それでも、この決断が。今日の決意が、いい方向に向かったと信じたい。

一歩前進だ。

いや、この世界に一歩踏み出してしまった：と言うべきだろうか。

明日も何事もなく、より良い未来へと歩けるといいのだが…。

今後の事をぼんやり考えていると、徐々に眠気がやってきた。

考えるのを止め、ゆっくりと目を閉じ、私は1日を終えた。

新入り

## 第4話 戦うために

学校と軍というのは似ている。

1クラスという戦術単位を20〜30人で区切り、5〜6個の（射撃）班、分隊に分け、バディ（2名）で日直。これは小隊編制に似ている。

担任教師が、その小隊の責任者である小隊長。クラスをまとめる学級委員が、小隊軍曹。1学年が約100名とすると、1個小隊から中隊規模の部隊になる。

これらをまとめ上げ、6個中隊となると、約1個連隊となる。全クラスの責任者の上官となる学校長は、連隊長という位置づけになる。服装。

詰め襟制服とセーラー服。これらは元々軍服である。ランドセルは歩兵の背囊からきている。

体育は基本教練。遠足は遠距離行軍訓練。

国語は訓練教本、マニュアル、命令書の読み書き。

数学は砲兵の弾道落下。作戦の進軍ルート。兵站計算。

歴史は過去の戦史。戦術、戦略。

整列も軍の小隊整列だとかと同じだ。

軍隊とは、一種の教育機関でもあるのだ。

武器を扱うため。国を守るため。敵を粉碎するため。ただ戦うだけでなく、頭を使う必要がある。

殆どの国も学校教育が軍隊の教育訓練から派生している。何も不思議な事ではない。

——— “指定防衛高等学校”。

指定防衛校（指定防衛高等学校）とは、「国内事態対処法」に基づいた国の指定により、防衛教育と地域防衛を行う高等教育機関のこと。

人口低下及び、イクシス侵攻後、民間防衛及び自衛隊の強化が必要

となった結果、未成年者もまた戦列に加えなければならない、と政府は判断。

防衛省が指定する高等学校に民間防衛の一環を託し、さらには卒業者の自衛隊への編入をも目論んで設立された。

民間防衛の先駆けとなるこれは、敵性勢力と交戦し、周辺地域に安全をもたらすのが任務だ。

低下した人口と、イクシスの攻撃で痛手を負った、この<sup>日本</sup>国の各防衛組織は、補助戦力が必要になった。

大学生は防衛大学校から志願者を募集するとして、それだけではまだ足りない。

そこで、指定防衛高等学校を設立し、高校生の志願者を募集した、というわけだ。

こうして見ると、高校と軍が組み合わさって、指定防衛高等学校ができたのは、時代や状況を見て——必然だったのかもしれない。

民間人から志願者を募集、または徴兵し、軍の兵員不足を補うのは歴史上でもあった。

第二次世界大戦のイギリス連邦、<sup>Home Guard</sup>ホーム・ガード。ドイツ第三帝国、<sup>Volkssturm</sup>国民突撃隊。大日本帝国、<sup>こくみんぎゆうたい</sup>国民義勇隊。

いわゆる民兵組織みたいなものだ。

残念ながら、これらの組織は大体は悲惨な目にあっている。

当然だが、物資は優先的に正規軍に支給される。

だから弾薬がない、制服・戦闘服がない、指揮官が居ないので自己判断で連携もせず戦う、とか。

破れかぶれのような命令で、作戦も戦術すらなく戦い、全滅した部隊も多い。

そもそも、守るべき国民が人的資源として消費されること自体がもう負け戦なのだ。国の存続に関わる。

防衛校が同じ道を辿らないか心配だが、今の我々は都市を空爆されてないし、そこまで戦況は末期ではない。

それに、指定防衛校は政府及び自衛隊主導でしつかりとサポートされているので、民兵組織ではなく、準軍事組織となる。

断定はできないが、今はまだ大丈夫：だと信じたい。

・  
・  
・

新入りの朝は早い。

：いや、言ってみただけだ。普通の起床時間である。

晴れて指定防衛高等学校の生徒になり、この世界の一員になった私には、やるべきことが山積みのようにある。

その前に、私の立ち位置と状況を、簡単に説明しておこう。

とりあえず、私の身元は保証されたが、あくまで表面的なところであり、深い経歴はぼかされているか、曖昧なままだ。

ここまですが限界だったのだろう。私が無理言って編成してもらったのだ。これ以上望むまい。

そして、その曖昧な立場を利用して、私はたまに：だが、別の所属に配属される可能性があるらしい。

原隊は私立古流高校だが、別の防衛校に派遣される可能性があるのだ。

不足した人員補充とか、即応の緊急部隊員としての運用を考えているらしい。

問題は、私の基礎体力が低すぎることに。

体力測定で推測され、おおよそ中学三年生後半と判断されたこの体だが、正式新規編成の4月になって、入学式から基礎訓練で体力をつけても間に合わない。

体力が、平均から低すぎた。：貧弱すぎたのだ。こんな状況では補充隊員どころか、銃を持ち自衛できるか：すら怪しい。



なので4月の入学式までの残り約3か月ほど、特別に繰り上げで既に古流高校に編成。正規の1年生として入学する前に、体力強化を行う。

まだ正規の生徒ではないので、教室は無いし、授業も無いが、学力に問題はないので、今は全力で体力をつけるのが私の仕事だ。

学生ズボンを穿き、ワイシャツの袖に腕を通す。ネクタイを着ける。

袖には古流高校の校章。支給された新しい防衛高校制服だ。

鏡で自分の姿をチェックする。しっかりとした制服に、清潔感があつて綺麗な好青年。

何度見ても、これには慣れない。こんな綺麗な顔立ちなのが、自分だとは思えなかった。

まるで他人を見ているような…ゲームだとか、爽やか系主人公のロールプレイをしているような感覚になる。

「…よし」

ともあれ、見た目は大丈夫そうだ。気合十分。

今日が初登校なので、第一印象は大事にしていきたい。

準備ができたので、玄関に向かい、ドアを開けた。

朝の爽やかな風と、朝日。活気のある人々の声が聞こえてきた。

「行ってきます」

誰も居ない自宅に、無意識に条件反射のように挨拶。

意味がないと分かっているけど、こう言わないと外に出る、と実感できななのだ。

ゆつくりとドアを閉め、鍵を掛けて、いざ出勤。

・  
・  
・

〃私立 古流高校〃

学科：普通科・特殊戦科・武器科

指定防衛校化により、民間防衛としての役割を与えられた当初は苦戦を強いられ、あまり目立った功績も無かった古流高校。

だが、特殊戦科設立を契機に戦果を上げ、注目されるようになった。当時の理事長と担当幹部自衛官の働きかけにより、実戦経験豊かな海軍特殊部隊が特殊戦科設立に関わった経緯があり、生徒達が積極的に彼らの技術と経験を取り込んでいった結果と云われている。

一般進学校だった頃から生徒の自主性を重んじる自由な校風だったが、指定防衛校となった現在でもそれは続いており、生徒の武器・装備の自由度の高さに現れる同校の特徴となっている。

自国・同盟国の武器、装備だけでなく、他国の装備を使う生徒も居るので、雰囲気的には Private Military Company (民間軍事会社) のような印象だ。

特殊戦科は厳しい日々のカリキュラムをこなす必要があるが、それ以外の学科では学校行事や部活動なども盛んで一般高校と変わらないう一面も合わせ持っている。そのため、数ある指定防衛校では張り詰めた緊張感はなく、割とゆるい雰囲気だ。

校訓は「勤儉力行」と「臨機応変」。

古流高校前。

「おお…」

つい興奮し、感動の声を出してしまう。

ちよつと特殊…いやかなり特別な事情と経験をして…だが、ここに…高校時代に戻ってきた。感泣ものだ…。

まだ冬なので校舎までの木は枯れ、桜も咲いてはいないが、ここは確かに高校なのだ。

何というか、失って気が付く物というか。自分が学生だった当時は学校面倒くさいな…、みたいな慣性のような、嫌々な義務感で動いて

いた。

しかし、大人になってから学生時代がどんなに素晴らしいものかと痛感する。

今更ながら青春をキーボードとマウス、ついでにゲームパッドに費やした前世を後悔した。…それはそれで楽しかったけど。

今世では友達の人でもできたら…いいなあ…。

…いやいや、悲願的になってはいけない。そのためにも今回は、ちよつとくらい積極的に行動しなければ…。

校門で立ち止まり思いに耽っていると、後ろから強い衝撃。

「あつ、す、すみません…!」

「わ、悪い…」

高校の玄関である校門で立ち止まるのは迷惑だった、申し訳ない。

「つて、あなたは…」

「あれ、あんた…」

「伽鳥さん!」

「あの時の民間人か!? それに、その制服は…」

お互いにぶつかった事を謝罪した後、見知った顔で2人とも驚いてしまった。

伽鳥さん。この世界に転生した時、助けてくれた人だ。

今私が着ている制服には古流高校の校章が貼られ、この高校の生徒であることを示す役割を果たした。

よく考えたら、伽鳥さんと同じ学校なのだ。彼女は同僚、または先輩となる。

「ええと…、色々と事情があつて入学することになりました。水本要です」

「急に色々ありすぎだろ…。…普通科2年、伽鳥だ。改めて宜しくな」  
雑な説明にツツコミを入れながら、苦笑する伽鳥さん。

冷静に考えたら、助けた民間人がいきなり同じ学校の生徒になつたら普通に驚くよね…。

こちらの何とも言えない説明に戸惑いながらも、握手してくれた。「2年ってことは…先輩ですね。宜しく願います」

「お、おう…なんつーか、異性から先輩って言われるのは変な感覚だな…嫌じゃないけど」

伽鳥さんは2年生らしいが、4月になって新入生が入学すれば、3年生になる。

そう考えると、一緒に居られる時間は非常に短い、と感じる。せつかく知り合ったのに悲しいものだ。

自分が若い頃は1日がまるで1週間のような長さを感じ、ただ毎日が苦痛だった。

しかし、歳を取れば取るほど、時間の流れは速く感じる。今の感覚で考えると、1年というのは本当に、短い時間だと思えた。

そんなことを考えていると、懐かしい音が耳に届く。

予鈴だ。

伽鳥さんに、周りの生徒たちも慌てて校舎に入る。

「つと、そろそろ行かないと。またな、後輩」

「はい、また」

お互いに小さく手を振って別れる。

教室を見たかったが、残念ながら私が向かうのは校舎ではなく校庭だ。

校庭。そこには、ある女性が待っている。

豊崎和花。

卒業生

古流高校のOBであり、自衛隊からの出向で古流高校にやってきた現役の幹部自衛官だ。

職場、軍で例えるなら…私の上司、上官に当たる人。

彼女からは教官、または先生と呼ぶように指示されている。

身元保証や自宅だとかも彼女が手配してくれたので、大変恩を感じる人だ。

以前まで敬語で話し合っていたが、上下関係ができたので、彼女は砕けた話し方で、私は敬語で話す。正直、私としてもそちらのほうがやりやすい。

「おはようございます、教官」

「おはよう、水本さん」

2人で朝の挨拶をする。

今日の彼女は陸自迷彩服ではなく、スーツだった。普段、学校に居る時はこの格好らしい。

「体力教練の前にこれを、覚えて損はないから」

そう言われ、クリップボードに挟まれた数十枚の資料が手渡される。

紙をめくると、あの不気味な犬怪物やら、敵の特徴について記録されたデータが目に入った。

…なるほど。この世界での常識の1つを教えてくれるのか。

かつて第二次世界大戦中、ドイツ国防軍の名将、エルヴィン・ロンメルは言った。

「汗は血を救う。血は命を救う。頭脳は両方を救う。」

古人曰く、敵を知り、己を知れば、百戦殆うからず。

敵を知り、自分自身を知るならば、戦いに負ける心配はない。

どんな時代でも、情報というのは非常に重要だ。

何も知らずに戦うより、敵の特徴、戦術を知って戦闘に突入したほうが、当然勝率は高まる。

つまり、体力鍛錬も必要だが、知識も必要だ。

私はまだ正式な1年生ではないので、教室も授業も無いが…最低限、知っておくべきことを教官から教わる。

人類の敵 “XXIIイクシス”

“ネスト” と呼称される空間から出現する。

停戦、和平交渉の試みは全て失敗し、現在に至るまで、コミュニケーションに成功した例はない。人類に対して敵対的な行動をとる以外、歴史、生態は不明。

大戦初期では非武装の動物型のみでの侵攻だったが、圧倒的物量と電撃的奇襲により世界各国に大打撃を与えた。

幸い、動物型は大して知性が高くないので、戦略・戦術で対処できる。

しかし、数年前の第2次大侵攻においては、戦訓を学習し、武装化された動物型、更に知性あるヒューマノイド型が出現し、明らかに指揮統制の取れた行動と強力な武装で人類に相対した：らしい。

時間の経過と共に、人類側の対抗手段を学習・模倣していくようで、彼らが手にする武器・装備は明らかに人が作り出したそれらをコピーしており、我々の戦況も厳しくなっている。

次に、敵の出現方法。ネスト。2つの状態がある。

ネストシード、巢の種。 / 明滅し、収縮するとネストに変化する。

ネスト、巢。 / ここから敵が出現する。

ちよつと分かりにくいのが、ネストシードが敵の出現予定地点だ。連中の種：シードが大きければ大きいほど、強力な侵攻部隊が出現する。

ネストが敵の出現位置。どうやって湧くのかは知らない。：ワームホールとかそういう感じで飛んで来るんだろう。多分。

ゲーム的に例えると、ネストシードが敵拠点、ネストになるとリスポ<sup>出</sup>ーン<sup>現</sup>地点になる。

ネストシードを発見した部隊が報告、ネストになる前に敵勢力に応じて戦力を傾け、防衛態勢を取り、包囲殲滅する。これが今の戦闘教義、ドクトリンだ。

リスポーンキルである。敵がここから来る、と分かっているからこそ、総火力を叩き込んで確実に殲滅するのだ。

もしネストに対処することになった場合。

防衛校の生徒は、民間人の避難、周辺地域の確保、他防衛校の増援、または正規軍の到着まで戦線維持が任務となる。

“XX|xK9x 獣型XX”

通称ケーナイン。野生の犬または狼をルーツに持つXXの複製型。

噛み付いたり体当たりといった原始的な攻撃方法でその攻撃・行動パターンは大型の犬や狼と同じ。移動速度も速い。

聴覚や嗅覚も良く、XXの目や鼻としても活動する。

私が初めて交戦した犬怪物：K9と言うらしい。遠距離から確実に仕留めるのが最も安全か。

あと、銃の取り扱い。

これはびっしりと警告から説明書まで、しっかり書かれ、更に教官から何度も言われる。

未成年、それも高校生に銃火器を渡すのだ。慎重になるのは当たり前だろう。

まだ私にライフルは支給されていないが、いずれその時がいつ来てもいいように、心構えを整えておきたい。

簡単な授業を終え、いよいよ戦うための準備に入る。

「早速だけど、今日の任務はただ走ることに、よ」

彼女の説明によると、私の体力強化が急務なので、基本教練や射撃演習より、まずスタミナをつけるべきなのだ。

こんな貧弱な体と体力では、銃を撃つなんて夢のまた夢。

とりあえず、校庭を走り続けて、昼休憩後から一部兵装、装備を付けて走る、というのが今日の予定だ。

指示だけ伝え、豊崎教官も校舎に入っていく。彼女も教師としての仕事があるのだ。

自主練習：といっても走るだけ。簡単である。

準備運動を済ませ、早速走り始めた。

・  
・  
・

「っはあ…、はあ…はあ…はあっ…」

…きつい。

まさか、ここまで自分が貧弱だとは思わなかった。

とりあえず昼休みまで走り続けたものの、周回中、何度も立ち止まってしまうた。

息を整えていると、豊崎さんがタオルと水を持って来てくれた。お礼を告げ、ありがたく頂く。

「お疲れ様。あなた、注目の的だったわよ」

「それって、どういう…」

「男子生徒は珍しいから。…授業中に窓から校庭を見てる子ばかりで、苦労したわ」

小さくため息をつき、困ったように苦笑い。教師というのものなかなか大変らしい。

簡単な食事を済ませ、落ち着いた後。

豊崎教官はクレート…木箱からあるものを取り出した。

「それじゃ、これ着て走ってみて」

「…何です、それ？」

「P A S S G T…パステットよ。旧式だけど、初めてなら丁度いい肩慣らしになるわ」

どうやら、ボディーマー…防弾チョッキのようだ。

森林迷彩のそれは、軽そうに見えたが、受け取るとずっしりと重量が伝わってきた。

そのまま思い切って着てみると、すぐ体全体が重々しくなった。

「重量は…確か、約9ポンド」



「ぐっ…!?!」

ついしやがみ込んでしまいそうなのを必死に堪える。

ポンド。ヤード・ポンド法か。

ああ、面倒だな…。一日も早くヤード・ポンド法が減びますように。  
9ポンドということは、…大雑把に計算して…大体だが、約4kg  
gってどこか。

4kg。

2リットルサイズの大きい飲料水が2本。

戦闘ではこれを着て、迅速に動かなければならない。

「だ、大丈夫…? もう少し後でも…」

ふらふらとする私を心配する豊崎教官。

しかし、ここで諦めていてはお先真つ暗だ。戦うための第一歩を踏み出さなければならぬ。

「いえ、やります…走らせてください」

自分に言い聞かせるように、気合を入れる。が、  
そう言っ走り出したものの、5週もしない内にどんどんペースが下がっていく。

「うーん…これじゃ基本教練は数週間後ね」

「ど、どういう意味です?」

「…それ、割と軽い分類のアーミーよ」

「なん…だと…?」

衝撃的な発言だった。これが、軽いアーミー?

もつと重たいものがあるというのか。

「ち、ちなみに陸<sup>陸上自衛隊</sup>自のアーミーは…?」

「セラミックプレートありの防弾チョッキ2型で12kg、ってところ  
かしら」

「12kg…!?!」

12kg。

2Lペットボトル6本、つまり1ケース。

文字通りアーミー、鎧を着て戦うようなものだ。

戦闘時の完全武装では、これに加え、更に武器…小銃の重さも加わる。

状況によっては装備品、無線機やバックパックも担ぐことすらある。

ああ…早速この世界でやっていくのが不安になった。

そんな心配が顔に出ていたのか、教官から励ましの声が届く。

「大丈夫！ あなたが諦めない限り、絶対に見捨てない。さあ、走って！」

「…はい！」

優しい…ちよつと泣きそう。どこの軍も諦めない限り、見捨てず共に戦ってくれるらしい。

こんなご時世だ。できることなら、できる限りの努力をしたい。

豊崎教官のためにも、精鋭…は無理でも、一人前の防衛校生徒になりたい。…そう強く願った。

この日から、私は走り続けた。

…焦っていたんだと思う。まだこの世界に来てから、私は何も出来ていない。劣等感があった。

ただ、がむしゃらに。文字通り、朝から晩まで。

食事、睡眠だけを短時間で済ませ、とにかく走った。

走ることだけではなく、体を鍛えるため、腕立て伏せ、腹筋、懸垂。手榴弾を投げるために、投擲訓練も並行して行った。

高校で行うトレーニングだけで訓練計画を立てていた豊崎教官には大変怒られた。オーバーワークだと。

ともあれ、私の体は若さを生かして、しっかりと持久力を付けていった。

・  
・  
・

基本教練。

いわゆる、気を付け、とか、右向け右…とか、よくある基本的な軍の規則のような動きだ。

さて、これは本当に必要なのか？　なんて疑問に思う人も居るだろうが、これはかなり重要な意味を持つ。

…連携が取れない武装集団を見て、どう思うだろうか？

民兵。市民兵。暴徒。

時代、立場によりけりだが、これらの言葉を見て強そう、と思える人は少ないはずだ。

物語でも、現実でも、大体は蹂躪される。

烏合の衆。規律も統一もなく寄り集まった群衆。

または、連携が取れ、効率的に戦闘が出来る部隊。

戦闘能力は、天と地の差である。

軍事パレードとかでもよくある部隊行進といった大した事なきそうなアレも、かなりの訓練を積んだ強者がなせる技なのだ。

つまり、軍という組織で規律と連携はかなり重要だ。

某航空魔女アニメのとある大尉が言っていたように、1に規律、2に規律、3も規律で、4から9も規律だ。

基本教練は文字通り基本となる、という訳である。

一応、豊崎教官から一通りの講習を受けたが、完璧に理解出来ているかは…何とも言えない。

というより、説明でも一応理解できるが、実際に自分でやるほうが好きだ。

そこで一度、校庭で実際にやってみるようになった。豊崎教官は既に見抜いているのかもしれない、私が感覚派ということに。

そんな訳で、今。私は各個教練を受けている。

「気をつけっ！」

…今更だが、豊崎教官の声はかわいい。女の子特有の柔らかい声が

いいよね…。いや、彼女の年齢だと、女の子ではなく女性と呼ぶべきだろうか？

訓練は真面目にやっているが、大半の思考は豊崎教官かわいい、である。

このきつい日々を超えて、メンタル維持できてるのは彼女のおかげと言ってもいい。

不真面目な思考をやめ、ビシツつとした声の指示通り、私は姿勢を正す。

不動の姿勢…というやつだ。

直立の姿勢で、胸をしつかりとはり、視線を真正面に固定、両手は握り体にびったり付ける。

なかなかにしんどい姿勢だ。

こんな事をやっているが、防衛校は軍学校ではなく、あくまで民間防衛。

防衛と普通の高校が混ざりあつた防衛校で、こういつた姿勢を取ったりするのは稀だが、何事も経験、ということ…一応やっている。

「休め」

号令通りの姿勢に変える。

休めの姿勢は左足だけ少し開き、両手は背中に回す。さっきの不動の姿勢よりかは、まだ楽な姿勢だ。

「敬礼」

掌を見せながら、頭に手を持ってきて敬礼する。

「…それはイギリス軍式」

「あつ、申し訳ない…」

豊崎教官は右手をあげ、手のひらを左下方に向け、正しい敬礼を見せてくれた。

さすが、自衛官といったところか。凜とした姿勢に、無駄のない動作。見惚れてしまう。

今までミリオタ、まあミリタリーオタクだった私だが…自衛隊のこ

とはよく知らない。おかげで苦労しっぱなしである。

援護射撃だとか、Infantry Fighting Vehicle I F V (歩兵戦闘車)とか、

洋画や海外製ゲームの用語のほうに慣れていて、自衛隊用語には大変苦労している。

自衛隊では歩兵戦闘車は、“装甲戦闘車”と呼ぶ。

援護射撃だけではなく、“突撃支援射撃”や、“突撃破碎射撃”など——自衛隊だけで使う用語も多い。

自衛隊は“軍”ではなく、“防衛組織”なので、独特な用語が多いのだ。

そのようなことも学ぶため、体力訓練だけでなく自主座学で、銃や軍事用語の勉強もしなければならぬ。

・  
・  
・

濃厚な数週間を終え、現在の私は…二年生に交じって走っている。

防衛校は普通の高校と同じく、大部分が普通の授業だが、一定時間こうした軍事訓練があるのだ。

ついでだから体力テストも兼ねて二年生に混ざって走っている。これが今日の任務。

「左！右！左！つ、右つ！」

それはそうとして、連続歩調とか制圧射撃とか、非常に固い用語を女の子が話すのって、かわいくないですか？

そう感じるのは私だけでしょうか。そうですか。

走りながらそんな事を考えて、現実逃避しているのも無理はない。

私は今、フル装備で走っているのだ。

手には64式小銃。体にはPASGTアーマー。

正直、総重量を数える暇なんてない。というか、考えたくない。ただ1つ分かっているのは、重い。ただ重い。以上。

「連続歩調ーっ、歩調、歩調、

ほちよーう、数えーッ!!」

「1 1 1 1 1! 2! そーれ!」

「1 1 1 1 1! 2! そーれ!」

しかし悲しいかな、すっかり訓練された私の体は自分の意志とは裏腹に、しつかりと声を出し部隊と共に走っている。

体力が付いたとはいえ、2年生には全然及ばない。そもそも彼女らは4月になれば、3年生なのだ。実質、この高校で古参となる。

私は最後尾で必死について行くのがやっと。ついでに数週遅れます。だが、数週間でここまでついて行けるようになっていたことを…誰か褒めてほしい…。

2年生も凄いが、それ以上に、豊崎教官には驚かされるばかりだ。彼女も汗こそかいているものの、息はあまり上がっておらず、まだまだ走れる、と言わんばかりの雰囲気だった。

しばらくこれ…走りをこなして、ようやく停止。

「お疲れ様」

「お…、お疲れ様…です…」

肩で呼吸を繰り返し、教官からの労いの言葉に答えた。

走り続けて疲労困憊、汗びったりである。一先ず、この重いアーマーを外したい。さっさと脱がせてもらおう。

装備を外していると、視線を感じた。

じっと見つめてくる子、チラチラと何度も視線を向ける子、視線を逸らす子。

訓練終了後、すぐに装備を外すのは何か問題だっただろうか…いや、周りの子も外しているし、他に問題があるのか。

戸惑っていると、豊崎教官から注意された。

「ここで脱がないで。…す、透けている…から…」

改めて自分の体を見ると、汗ばんだ白いワイシャツから自分の素肌がうつすらと見えた。汗透け、というやつか。

そういえば、この世界では男性の素肌は、女性と同じくらい破廉恥なものだった。迂闊な行動だったな。…前世の感覚のせいで、やりづらい世界だ。

…というか、今の豊崎教官の言葉、なんか官能的だな…。もう一度言ってくれないだろうか。

「すみません、もう一度言ってく…」

「早く着なさい」

「…はい」

すつとぼけてみたが、言ってくれなかった。

渋々、ボディーマーを再着用する。つらいが仕方ない、我慢だ。1人の勝手で、団体の協調を乱してはならない。

演習終了後、部隊が解散し、皆がそれぞれの目的へと散っていく。私も帰ろうと思ったが、豊崎さんから呼び止められた。

「体力もついてきたし…そろそろ、射撃訓練に入ってもいいかもしれないわね」

「ほ、本当ですか!？」

体力テストは合格だったらしい。その言葉を聞いて、私は歓喜した。

つ、ついに…。遂にこの時がきた。

私とて男の子である。銃、航空機、パワードスーツ、決戦兵器とか、そういう言葉は男の子なら、みんな好きはず。

とにかく、この世界で兵士としての役割を果たす第一歩を与えられたのだ。

今から射撃訓練が待ち遠しくて仕方ない。

## 第5話 護るために

遠い昔、遙か彼方の銀河系で…とある凄腕密輸入人の伊達男が言った。「バカげた念力と古臭い武器で、ブラスタ<sup>射撃武器</sup>ーに勝てるわけがねえ！」

全くその通りである。

銃。

そう呼ばれる武器は、登場したその時から、常に戦いの最前線にあり続けた。

剣が銃に勝てるか、否。 盾が銃に勝てるか、否。 弓が銃に勝て

るか、否。

これまでも、そしてきつと——これからも、銃は兵士の武器という選択肢で、常に素晴らしい選択として存在するだろう。

そんな強力な武器を私は…今、手にしようとしていた。

古流高校、校庭。

私と豊崎教官の2人だけで、ささやかな銃授与式が行われた。

お互いに銃、と復唱した後、小銃を受け取る。

64式7・62mm小銃。それが今、私の手に握られている武器だ。

1964年に制式採用されたこの国産小銃は、陸海空の全自衛隊で採用されている。

日本人の体格に合わせた設計で、命中精度を高めるため、そして防衛戦闘に有利な二脚<sup>パイポッド</sup>を標準装備。まさに自衛隊を代表するような小銃だ。

装弾数はボックスマガジン、箱型弾倉で20発。弾倉内部はダブルコラムマガジン、複列弾倉で弾丸を2列に並べて収めてある。

…すらすらと小銃の情報が出てきたのは、自習のおかげだ。私はた



だ走るだけの脳筋ではない。

「立て、銃」

直立不動の姿勢で真っ直ぐ立ち、身体の右側に銃を立てて持つ。

「…今あなたが手に持っている物は、簡単に敵を、そして人さえも無力化…」

いえ、…殺すことができる武器よ」

…改めてそう言われると、右手にある小銃が、急に重々しく感じられた。

これは戦うための武器。引き金を引くだけで、命を奪うことができず、人類はとんでもない物を開発してしまった。

そんな恐ろしい兵器が、今。自分の手にある。…気が引き締まった。

「部隊行動基準を遵守して。決して軽々しく扱わないこと。…小銃の重みは、責任の重み、よ」

「残念ながら、銃は武器。敵を倒すためだけの物。」

…でも、指定防衛校のあなたは…、…倒すために撃つんじゃない、護るため。誰かを護るために、撃ちなさい」

…護る、ため。自分にできるだろうか。

…いや、やらなければならぬ。それがここに居る者の役目。いや、この世界で決意した…私の使命なのだ。

「覚悟は？」

「…できています、国家と国民のために尽くします」

緊張のあまり、イギリスの For King and Country みたいな意思表示になっちゃったが、意気込みは伝わったようだ。

彼女は真剣な顔で頷いた。

「担え、銃」

教官の指示通り、肩に小銃を置き、手で銃床…肩に当てるストック部分を持って安定させる。

「…うん、いい顔になってきたわね」

平和ボケして腑抜けた顔から、それなりに一人前の兵士の顔つきになってきているのだろうか。

ともあれ、ここまで来てしまった。

…今更、後戻りなどできない。ならばせめて、戦い抜こう。最後まで。

・  
・  
・

校庭に複数の的。そして、跳弾や流れ弾を防ぐための分厚い装甲鉄板。

私は初めての実弾射撃訓練に入った。

目を保護するため、シューティンググラスをして。

耳を保護するため、ヘッドセットを装備している。豊崎教官も似た感じの格好だ。

たった数週間の基本訓練で射撃訓練とか大戦末期の軍かよ、と思われるかもしれないが、とりあえず小手調べ。これで射撃の適正があるか調べる。

そもそも何処からか突然、<sup>イクシス</sup>敵が襲ってくる時代なのだ。一刻も早く、銃に慣れなければならぬ。

「ところで教官。何故、小銃から撃つんです？ 拳銃から慣れたほうが、簡単だと思いませんか？」

「…最もよく使う武器を使いこなせない兵士は居ないわ。拳銃は主力じゃなくて、補助武器なのよ」

…なるほど。剣を扱えない剣士なぞ居ない。  
基本的な武器から熟練させていくのは当たり前か。教官の言葉そのまま、拳銃はサイドアーム…副兵装なのだ。  
拳銃を主力にしているのは、警官隊である。防衛校ではない。…とはいえ、実際はこの世界の警官隊も、イクシスのせいで重装化している。本当に拳銃は予備火器になってしまった。

「状況開始」

教官の号令に従い、小銃の準備をする。

…よくアニメや映画で戦闘に突入する時、「状況開始」と勇ましく作戦開始の言葉になってしまっているが、本来は「訓練状況開始」、という意味で、実際の戦闘作戦では使われない言葉だ。

…まあ状況開始って言葉と響き、かつこいいよね…。気持ちは分かる。声に出して読みたい日本語だもん…。

「立射、姿勢点検始め」

立射とは、小銃の射撃姿勢の1つ。立ったままで、両腕で銃を支え射撃をする仕方。立ち撃ち、というやつだ。

姿勢点検始め、は射撃態勢を準備せよ、という指示。

「よし」

教官からの命令に、一言で簡潔に返答する。

余談だが、軍というのはキビキビと短く、簡単に返事をする。

自衛隊では「異常ないか、質問ないか」に対し「なし」とだけ返答する。

今、私が返答した「よし」も「(射撃姿勢)よし」という短い返答なのだ。

立ったまま64式小銃を構え、実弾が装弾された弾倉をP A S G T  
アーマーから取り出す。

「安全装置、よし！ 弾込め、よし！ 単発、よし！」

決められた一連の動作を終え、射撃準備を整えると――教官から攻

撃指示が届く。

「前方、3の台、300、単射、指命！」

淡々と単語を並べていく豊崎教官。

知識無しで聞くと、これらの言葉が何を言っているか、全くもって意味不明だろう。

しかし、座学でこれらの専門用語を叩き込まれた私には、全て理解できる。

簡単にすると「前方、的番号3番、距離300m、単発射撃、攻撃用意」こんな感じだ。

前方の標的にはそれぞれ番号が振られている。最も遠くにある3番と番号が振られた的、ここから距離300m。

単発射撃、つまりセミオート。これは1回引き金を引けば、1発のみ実弾が発射される。安全装置を動かし、このモードに切り替える。

「射撃用意！」

全ての準備が整い、あとははいよいよ射撃するのみだ。

「――撃て！」

――その攻撃指示と同時に、私は引き金を引いた。

体力教練で鍛えられたと思った体が、発砲の強い衝撃を受け、思わず後ろに倒れこみそうになる。が、何とか耐えた。

発砲した小銃は自分の手では安定を失い、銃口は大きく上を向いた。リコイルコントロール、反動制限が全くできなかった。

「姿勢点検、膝撃ち。続いて撃て！」

膝撃ち、しゃがみ撃ちだ。同じく1発、発砲する。

先程よりは銃の反動を吸収しやすく、反動制限もできた。

「姿勢点検、伏せ撃ち。撃て！」

伏せ撃ち。文字通り、匍匐状態での発砲。伏せて射撃する。

銃口から発砲炎が発生し、左右後方に広がる。排莖口からは綺麗に輝く空莖莖が現れた。

これがボルトアクション銃でコッキングでもしていれば、きっと凄腕狙撃手のような雰囲気だろう。

とはいえ、新人射手は初めての実弾射撃で、極度の緊張状態にあっ

た。凄腕狙撃手なんぞ、今の状態では到底実現しそうにない。

伏せ撃ちは、最も反動を吸収しやすく、ある程度は落ち着いて射撃できた。

制服が校庭の砂で汚れるが、気にしていられない。きっと実戦ではもつと酷い環境もあるだろうし…。

「撃ち方止め」

一通り基本的な射撃態勢を終え、教官から射撃中止の指示がでた。安全装置をかけ、次の指示を待つ。

双眼鏡で戦果を確認中らしい。

なにはさておき、ここまで無事にできてよかった。これから防衛校の戦力として、皇国の剣と盾として戦——

「…命中弾なし」

「えつつつ」

命中弾、なし。3発射撃して、1発も当たらなかった…？

啞然としている私に、教官は双眼鏡を手渡した。自分で確かめろ、と。

300m先、3番の目標を確認。的には穴どころか、綺麗さっぱりで命中弾は1つもなかった。

「じゅ、銃に問題は…？」

「無いわ。整備済み、最近追加製造された小銃で、新品よ」

問題があるとしたら…射手。私か。

「と、とりあえず別の目標を撃たせてください」

「…了解。姿勢点検始め」

豊崎さんが外していたヘッドセットを着け直す。横風が吹き、彼女の髪がなびいた。

相変わらず何をしていても様になる人だ。

…その後。

200m、100mに50mと距離を様々な距離を射撃していく。1つの目標に5発つづ発砲。

200mで命中弾1発、100mで2発命中。もはや近距離戦闘の50mはさすがに全弾命中。

…しかし、かなり低い命中率だ。これで実戦に出したら、棺桶に入って帰国するだろう。

「…補習ね」

「くっ…」

悔しい…！悔しい…！悔しいっ…！！だがこれでいい——！

いや、よくはないんだが…。

人間とは、失敗する生き物だ。最初から全てが完璧に上手くいく人物など居ない。居たとしたら、そいつは強くてニューゲームした転生者だ。

失敗すると、それは経験になる。

経験を積み重ねると、失敗はなくなり、それは成功となる。

確かに、私の小銃命中率は酷いものだった。失敗だ。

だが、民間人同然の素人が初射撃で、数発でも命中弾を出せた。よく考えたら凄いことだ、上等ではないか。

「そんなに気を落とさないで。初めてなんだから」

そう、まだ始まったばかり。ここからが本番なのだ。

「…ちよつと立射の姿勢をとって」

小銃の安全装置を直し、弾倉を外し薬室から排莖動作を終えた私。

今、この銃に戦闘能力はない。実弾を取り除いた小銃で、何をすればいいのだろうか。

教官の指示に沿い、立ち撃ちの姿勢になり、小銃を構える。

「…姿勢から直す必要があるわね」

どうやら、基本である射撃姿勢からして未熟だったようだ。基本と基礎がないなら、応用なんてできない。反省点が多すぎる。

そのまま構えの姿勢で考え込んでいると、手にふわりとした、柔らかい感触を感じた。

「銃床をしつかり肩に当てて。射撃の邪魔にならないよう、左手は

もつと下に回して」

…近い。

気付けば、背中からぴったり密着されている。後ろから抱き着かれているように見えなくもない。

銃の訓練をしているだけ、と分かっているが…それはそれとして、…この状況はちよつと冷静になるなんて無理だ。

「足をもつと開く！ 立ち撃ち、この姿勢で最大の戦術的優位性は、機動性よ。即座に移動できるように意識すること」

「…教官」

「質問事項かしら？」

「…近いです」

「あら…、ごめんなさい」

…お互い気恥ずかしい雰囲気になってしまった。

…と、ともあれ——この日から私の教練に体力強化だけでなく、射撃訓練が加わった。本格的に防衛校生徒として歩みだしたのだ。この世界に、私はどこまで足掻けるだろうか。

…

…

…

おはようございます。

初めて自分の小銃を受け取ってから、幾許かの時間が過ぎました。あれからも毎日のように射撃しています。

朝と言えば、小鳥のさえずりだとか、元気な挨拶が聞こえるもんですが、今ここで響き渡っているのは銃声です…。

屋内射撃場。

近代的な屋内型シューティングレンジがずらりと並んでいる。近くにはガンラックが設置され、大量の銃火器と弾薬が保管されている。

る。世界大戦でも始められそうな量である。

思わず息をのむ光景だった。

現在、古流高校の校舎に設置されている、室内射撃訓練所に来ている。

いつでも校庭で射撃訓練できるわけではない。というか、そもそも校庭でやるのは稀らしい。部活や授業でグラウンドを使うし、細心の注意をしているが、流れ弾とかの民間住宅地への被害が怖い。

だから、基本は屋内射撃場で銃の訓練をする。

「腕はここだ。…いや、そっちは前に」

今、背後から訓練をしてきているのは伽鳥杏奈。伽鳥先輩である。

何故、豊崎教官ではなく伽鳥先輩が私の訓練をしているのか。答えは簡単だ。教官も忙しいのである。

教師、教官という立場で私だけ訓練をしているほど、時間に余裕があるわけではない。

変わりの教育係として、面識のある伽鳥先輩が選ばれた、という訳だ。

「めんどくせーなー」なんて言っていたがこの人、かなりいい先輩だ。

私1人で訓練していたら来てくれるし、武器管理委員で何も言わず、後輩の装備を日々整備している。

ぶつきらぼうな口調も照れ隠しなのかもしれない。かわいい。

「…もつと頬よせろ」

いや、これ以上に頬よせたら、顔がくっつくんですけど。

それにしても、どうしてこの世界の女性はこうも簡単に…至近距離で触れてくるのだろうか。これが普通なのか。私が気にしすぎなのだろうか。

「も、もう大丈夫です。射撃を再開します」



気恥ずかしくて私の耐久値が無くなりそうだったので、さつきと切り上げる。

再び引き金を引き、的へと射撃。

単発で丁寧に1発1発撃ち、1マガジン：20発を撃ち切る。

「撃ち方やめ」

標的を確認する。屋内射撃なので大したスペースはなく、最大150mまでの標的しかない。

しかし、防衛校の主戦場は市街地。入り組んだ街中で遠距離を狙うことはそうない、と伽鳥先輩からアドバイスを頂いた。

「…うん、良くなってるな」

「教官に恵まれましたから」

10m、20m、50mは全弾命中、150mも高い命中率を維持できるようになってきた。

人間、どんなことでも毎日続ければ熟練し、練度が上がっていくものである。

ここには大量の銃器が保管されているので、64式小銃だけではなく、他の小銃での射撃訓練も行った。

89式5.56mm小銃。M16自動小銃、M4カービン。自国だけでなく同盟国の小銃でも訓練。

ありとあらゆる状況で、多数の武器を扱えたほうがいいに決まっている。

更に、古流高校は個人が自由に好きな小銃を使えるので、海外製の武器を好む生徒もいる。本当に多国籍な…色んな武器が混ざりこんでいるのだ。

今までと違う小銃の印象に戸惑いもしたが、クセのある武器じゃない限り、基本的には一緒だ。これらも半分以上の命中率を収めた。

それらの結果を見て、伽鳥先輩は満足したのか、「今日の射撃訓練はこれで終わりだ」と告げた。

銃に安全装置を掛け、装弾されている弾を排出して無力化。安全点

検・確認を徹底する。

「そろそろ次行くぞー」

「次…って、どこに行くんです?」

「着けば分かる」

私の疑問に答えることなく、先輩は校舎に入っていく。慌てて後を追った。

校舎内を歩いていると、男子生徒は珍しいのか、やはり視線を感じる。

「見ない子だよね」とか。「転校生かな」とか。すみません、私まだ部外者なんですよね…。

そんな視線と雰囲気にも関わらず、彼女はどこかへと歩いていく。無停止進撃だな。

しばらくして、彼女はある部屋の前で止まり、鍵を開けた。

特別棟2階、武器管理委員会室。

なんてかっこいい響きなんだ…武器管理委員会。名前からして強すぎる。これには某ライフル協会もにっこり。

「ん…、…けほっ、けほっ」

扉を開けると、顔に鉄やオイルといった臭いが襲い掛かった。むせる。

まるで自動車工場のような臭いだ。置いてあるのは自動車ではなく、銃火器だが。

伽鳥先輩はもはや慣れっこなのか、顔色すら変えず…むしろ慣れ親しんだような、安心したような表情で中に入っていく。

「ほお…」

自分も続いて中に入ると、気分が高揚してつい声が出てしまう。大量のガンラック。ミリタリーハードケース。拳銃から機関銃ま

で、各銃火器。弾薬。

中には1年、2年、3年生とそれぞれに文字が刻まれたテープが張られているウエポンケース。

…まるで武器庫だな。さっきの屋内射撃場より多くのライフルが置いてある。高校に大量の武器があるなんて、凄い世界だ。

「よし、始めるか」

「始めるって…何を」

某アクション映画みたいに「何が始まるんです」「第三次大戦だ」みたいなやり取りでも始めるかと思っただが、もつと地味な作業であった。

「分解だ」

そう言うと、彼女は素早い動作で銃をバラしてしまった。

ああ、遂にこの作業が来てしまった…。銃の分解・組み立てなんてどうやるんだ。

「先輩、これ本当にやるんですか…？」

「当たり前だろうー？ いざという時、命を救えるのはこ小銃銃だけだ」

…確かに。

実戦で一番頼りになるのは他ならぬ、銃。自分が持っている武器こそが、最大の攻撃にして防衛。

ライフルさえあれば、自分だけでなく、同僚や市民を助けることができる。

その自分の武器を知っておくのは、とても重要なことだ。戦闘中に故障して殉職、なんてのは御免である。

そもそも、整備班が常に支援してくれる、なんてのは期待しないほうがいい。彼女らは後方部隊扱い。常に支援部隊が居る環境は少ないだろうし、きつと最前線では己の力で整備する必要がある。整備は避けて通れない道のようだ。

「…めんどくせーけど、ちゃんと教えてやるから。ほら、やってみろ」

「先輩…！」

優しい。本当に面倒見がいい人だ。ちよつと涙ぐんでしまった。いやはや、歳をとると涙もろくて困る。

伽鳥先輩は素早くチャージングハンドルを引き、薬室内を確認した。：ちよつと待って。今の凄いかっこいい。

「ちよ、ちよつと今のやらせてください：！」

今まで安全点検で数回やったことがあるが、こうして見ると映える動作だ。

銃を少し斜めにして、ハンドルを引く。チャキンつと聴き心地の良い金属音が響いた。

はあーっ：かっこいい。

「：映画の見すぎだな：」

伽鳥先輩からは呆れた顔で見られた。

遊んでないでさっさと作業しろ、と怒られたので、彼女の教えに従い64式小銃を分解していった。

ここから先は：正直、思い出したくない。

ガンオイルで手はベトベト真つ黒になるわ、撃鉄バネを無くしたと焦って探していたら、胸ポケットに入ってた、とか。

64式の分解手順を文章化して提出しろ、と言われたら全力で拒否したい。1万文字超えるんじゃないだろうか。

それくらい：大変な作業だった。

今日分かったこと。

とにかく、この相棒小銃は：非常に手が掛かる。

## 番外編1 聖夜と人恋しい教官

12月25日。クリスマス。

一般的な年中行事の1つでもあるこの日は、イクシスとの戦争中にも関わらず、多くの人々が街を歩き、この日を祝っている。

戦時中に暢気なものだ、と思うかもしれない。

だが、この終わりの見えない戦争中だからこそ、息を抜く事も大切だ。常に気を張り詰めていると、いつか潰れてしまう。

だからこそ、楽しめる時に思いっきり楽しむのだ。

そんな中、私は走っていた。

強くなるには体力が必要だ。

放課後からずつと、街を一周し、また一周。走り続けていた。ただ強くなるために。

よりにもよって、聖なる夜に自主トレーニングとは少々寂しいが、家でじつとしているより健康的だろう。

前世からほとんど1人なのだ。どんな日に孤独だろうと、今更何とも思わない。

いや本当に…何とも…。くつ、視界に入る恋人共め…羨ましい…ッ。

何度目かの周回で、再び商店街に入る。

レンガで精密に作られた歩道に、ガラス張りのお洒落な店舗が煌煌と暖かい雰囲気を作っている。

歩道の真ん中には大きなクリスマスツリーが設置されていて、大勢の人々が楽しんでいた。

ふと、そこで見知っている人物を見かけた。走るペースを落とし、少しずつ近づいていく。

その人は街中のベンチに座り、俯いていた。何とというか、雰囲気がどんよりと暗い。

淡いグレーのような、まさにこの季節の雪のように綺麗な髪。黒いスーツ。

…豊崎、教官？

声を掛けようかと思ったが、つい立ち止まってしまふ。

いや、待つて欲しい。もし、別人だったら。恥ずかしいどころの話ではない。

そもそも、あの。あの、豊崎先生だ。こんな日に1人で居るはずがなからう。他人の空似とか、よく似た人に違いない。

…よし、そのまま通過だな！

ゆっくりと横を通り、再びマラソンに戻ろうとする、が。

「…水本、くん？」

「……豊崎……教官……」

自分の名前を呼ばれ、ビクツと体が驚きで跳ねる。まさか、本当に教官だったのか……。

「随分と汗をかいてるけど…、一体どうしたの？」

「いえ、ちよつとトレーニングを」

「こんな日にまで熱心ね……」

呆れたように苦笑される。

ちよつと気にしてたので、その精神攻撃は止めて頂きたい…。俺に効く……。

「教官はここで何してるんです？」

私の反撃は思った以上に効果的だったようで、彼女は少々気まずそうに視線を泳がせた。

「ああ、ここで誰かと待ち合わせ、とか」

何となく予想で言ってみたその一言。すると、豊崎さんは俯きながらぼつり、と小さく呟いた。

「……………わ……」

「え？」

「…何も無いわ…相手も、予定も……」

「…さいますか…。…では、失礼します」

何か面倒そうな感じだし、さっさとマラソンに戻りたい。私には時間がないのだ。限られた時間で強くならないと。歩き出そうとしたところを、ぐいっと掴まれる。

「ちよ、ちよつとー!」

「何です…?」

彼女は何も言わず、無言のまま、広場を見つめる。私も同じように視界をそちらへ動かした。

クリスマスツリーの下で、相変わらず楽しそうな人々。明るくはしゃぐ家族や、身を寄せ合うカップル。

…ああ…。そういうこと、か。

「これが、我々の守るべき日常なんですね…」

こうした日常を見せることで、自分が民間防衛の最前線に居る、ということ再確認させたかったのか。さすがは教官です…! さすきよう!

彼女を見ると、プルプルと震えている。教え子の成長への感動か、それともこの季節の寒さにやられたか。

「違ーうっ!」

「!？」

「あーっ…もう! その考えは間違ってないし、立派よ?

でも!今はそうじゃないの!」

突然の否定と肯定で混乱する。つまり何が言いたいのか。次の言葉を待っていると、

彼女はしばし躊躇した後、恥ずかしそうに小声で話す。

「子供みたいと思うかもしれないけど、寂しかったのよ…:ああいう光景を見ると、どうしても…:ね」

…なるほど。休日公園に行ったら家族連れが居て精神的ダメージを食らった、的な…:認識でいいのかな。あるある。

つまり誰かと居たい、ということなのだろうか。…そういう事なら、私のお願いを聞いてもらおう。

「では…すみませんが、トレーニングの助教をお願いします」  
その言葉を聞いて、豊崎さんはガクツと脱力する。

「…、ここはエスコートします、って優しくする場面じゃないの!？」

「はははは、そんな社交性が私にあると思いますか」

「そんなんじゃない、ずっと1人よ。男子力、鍛えなさい」

「ぐはあ…ツ!!」

致命傷。聖なる夜に何と無慈悲な攻撃。

傷は深いぞ、ガツカリしろ!…いや、今更である。うろたえない!

このような攻撃で私はうろたえないっ!

「そもそも、そういうのって女性の役割でしょう…」

「あら、たまには男の人にリードして欲しい時だつてあるのよ?」

このあべこべ世界では、女性がリードするのが普通らしいが…。

だが、教官の言っていることも…:うーん。何となく分からなくも…ないような…:気もする。

先程の言葉の暴力から精神力を回復させていると、彼女は唐突な提案をし始めた。

「あなたの家で宅飲みしよっか」

「ちよつと待って。どうしてそうなるの…?」

宅飲みって。おっさんか。

ぐいぐいと腕を引っ張られ、強制連行される。どうやら、買い出しに行くらしい。

「ああ、もういいです。付き合いますよ。日頃からお世話になってますし」

「よろしい」

さっさと頭を娯楽に切り替える。いつそ楽しもう。たまには周りの雰囲気に戻された方がいい。

それに、彼女には本当にお世話になった。日頃の感謝をこんな形でも返せるなら返したい。



宅飲みということで、夕食の調達場所はコンビニを提案した。

豊崎さんからはムードも何も無いわね…と残念そうな顔をされた。  
私には恋愛についての勉強も必要らしい。

コンビニで夕食の調達中、お酒のコーナーに来た。宅飲みなのでこれがメインと言つてもいい。

「うーん、これにしようかしら」

「では私も…」

先生が缶ビールを手に取ったので、便乗して適当に選ぼうとしたが、がっしりと腕をホルルドされ、ジュースのペットボトルを渡される。

「あなたにはまだ早いわ。教育者として未成年の飲酒なんて認められません」

…そうだった。この世界では私は成人していない。教師の鑑である。それはそうとして、先生が生徒の家に宅飲みしに来るのはどうなんでしょうかねえ…。

買い物を済ませ、レジで精算して財布を取り出すと、豊崎さんに止められた。

自分が誘ったんだから自分に出させてほしい、と。律儀な人だ。結局、彼女の奢りになった。

こういう時ぐらい、大人に頼りなさい。とも言われた。

そう言われても、中身の精神年齢は結構成長しているので、何でも自分で解決しようと考えてしまう。もっと子供らしく振舞うべきなんだろうか。

早速、家に向かうかと思つたが、どうやらチキンとケーキも調達するらしい。やるからには徹底的に…ということか。

「ホールケーキにする？」

「いや、食べきれませんよ…ピースとかカットサイズのショートケーキでいいと思います」

そういえば、豊崎さんは甘味が好きだった。彼女ならホールケーキでも食べれてしまうかもしれない。

しかし、ここは手堅く安定の小さいサイズを進言しておく。  
私の進言を採用して、我々の手荷物に小さいサイズのケーキ2つが  
加わった。

「…」

「…?」

無言で帰宅ルートを歩いていると、彼女から手が差し伸べられた。  
何だろうか。何かを伝えるハンドサインだろうか。

「…あつ、荷物ですか?」

「どうしてそうなるのよ…」

豊崎さんの荷物を持つとうとすると、ため息と共に呆れた視線が飛ん  
でくる。

「手、繋いで」

「なっ…」

不意打ちのように言われたその言葉に思わず、くらっ、ときてしま  
う。

彼女は、横顔からでもはつきりと分かるくらい、赤く紅潮している。  
きっと私の顔も似たような感じだろう。

手を繋ごうと、ふらふらと手のひらが前後に動く。勇気が出ず、あ  
と一步を踏み出せない。

痺れを切らしたのか、遂には彼女から手を握られた。

…あたたかい。

女性と手を繋ぐなんて、何年ぶりだろうか。いや、人生初めてかも  
しれない。

心臓は張り裂けそうなくらいに——鼓動が早くなっている。しば  
らく、横に居る彼女の顔を冷静に見ることは…できそうもなかった。

・  
・  
・

「…ただいま」

「お邪魔します」

真つ暗な部屋。電気のスイッチを入れ、明かりを灯す。

「必要な物以外、何も無いのね…」

「そう…ですかね？ 結構充実してきたと思ったんですが…」

この自宅には、ベット、キッチンと冷蔵庫、シャワーとか、生活に必要な物しか置いてなかった。

最近、徐々にテーブルとイスとか、テレビにソファアーだとか揃えてみたのだが…豊崎さんから見ると、まだまだ殺風景らしい。

ふと、時計を見る。

「豊崎さん、もう結構遅い時間ですけど…どうするんです？」

「…泊まってもいいかしら…？」

「ええ…構いませんけど」

今日は随分ぐいぐい来る教官殿である。それほど人恋しかったのか。もうここまで来たら、私でよければ付き合いますとも。

「シャワーどうします？ 教官が着れそうな服は無いんですが」

「高校と駐屯地に着替えがあるから、明日の朝一でそれに着替えるわ」  
「分かりました。では、先に入ってきてください」

彼女がシャワーを浴びている間、テーブルに買ってきた晚餐を用意するとしよう。

30分程経って、シャワーから戻って来た豊崎さん。

火照った顔に、少し着崩したスーツ。少量の水滴がついて湿った髪。服装こそ変わってないもの、お風呂上りの彼女はとても色っぽく感じた。

…いかんいかん。高まる気持ちを静める。

「シャワーありがとう。あなたも入ってきて」

「いえいえ…よければ、先に食べてもいいですよ」

短いやり取りの後、気恥ずかしい気持ちを隠すように、逃げるようにバスルームに入る。マラソンで汚れた体を洗い流し、シャワーで素早く入浴を済ませる。

リビングに戻ると、豊崎さんは少し眠そうに、俯いた様子であった。私が戻るまで待っていてくれたらしい。

「…もう寝ますか？」

「いえ、飲むわ…飲みたい」

どうやら宅飲み作戦を強硬するらしい。

テレビを用意し、その液晶内にある機能から、映画ライブラリーを起動した。こういう催し物は、やはり映画を見るべきではないだろうか。

「なるほど…ダウンロード版を買っているのね」

「これなら場所取りませんし、楽でいいですよ」

映画に限らず、音楽に本やゲームソフト、これらは今やデータでやり取りできるようになった。便利な時代になったものである。もつとも、紙でめくれない電子文庫が嫌いだとか、手元がないと不安だという人も居るが、ここは個人の好みだな。

選択したのは某洋画アクション映画だ。

クリスマスの夜。地上40階！超高層ビルは戦場と化した――！

強盗団に占拠されたロサンゼルスの高層ビルを舞台に、妻を人質に取られて孤立無援のニューヨーク市警察の刑事が、その救出と敵の壊滅に奔走するアクション映画。

ダクト内を這いずり回ったり、ホースを体に巻いて、屋上から飛び降りたりして、敵の目を欺きながら行動する。

様々な困難や、強敵を乗り越えて。妻を助け出して、生還した2人は、最後はキスをして愛を確かめ合いながら言うのだ。メリークリスマス、と。

大混乱を極めたロスに、ようやく穏やかなクリスマスが訪れる。…というお話だ。

やはり、映画はいい。

絶望的な状況を乗り越え、最後には何かを得るか、取り戻す。救いのある話というのは、人に希望を与える。だから私は、映画が好きだ。

2人で映画を楽しみながら、夜は更けていった。

・  
・  
・

深夜。

つわものどもが夢の跡。ささやかな宴も終わり、しんと静まった室内。

既に電気は消して、少しカーテンを開けている状態だ。

今夜は月がよく見えるので、せっかくだから少し眺めたかった。窓から月の明かりがうつすらと差し込む。

豊崎さんを見ると、ぐったりと机にうつ伏せになっている。酒は飲んでも飲まれるな、というが…これは完全に…潰れてしまっているな。

「…先生」

「…うん……」

とりあえずリビングで寝られても困るので、申し訳ないが起こす。

「ここで寝ると風邪引きます」

「……ごめんなさい」

私の声で、ぼんやりとこちらを向く豊崎さん。寝ぼけているのか、酔っているのか。

ぼつりぼつり、と静かに語りだした。

「私ね……寂しかったのよ」

「まるで…世界に1人だけ取り残されるんじゃないか…、って」

その感覚は：強く、共感できた。

以前、防衛校に入学する時に感じていた恐怖だ。

武器もなく、民間人として戦えもせず、イクシスに消されるか。

兵士として戦闘に突入しても、自分か、いつ隣に居る友や戦友が消えてもおかしくない。

もし、再びイクシスが全面攻勢に出たら。我々は、持ちこたえられるのか。

「まあ：分かりますよ。こんな状況ですし。

明日生きてるかどうか：つてのはいいすぎかもしれませんが、いつかそんな戦況になっても驚きません」

「それに：教え子が：つ、みんな：、居なく：なるかもつて、嫌な想像ばかり：」

見れば、彼女は涙ぐんでいた。

未来ある若者に軍事訓練をして、戦地に送る。その重みを——ずっと彼女は一人で背負っていたのだ。

それが、どんなに辛いことなのか。

もし、自分が面倒を見た生徒が、棺桶に入って帰って来たら。想像もしたくない惨事だ。

：間違っている。何もかも。時代も、状況も、こんなことが許されるのか。

そう叫びたくなる事は何度もあった。

しかし、これが現状だ。これが今の時代なのだ。理想を語っても、敵は攻撃してくる。

「大丈夫ですよ、先生の生徒は優秀です。簡単にはやられたりしません」

慰めになっているか分からないが、フォローしておく。

実際、教官の訓練は効率的だし、生徒もよく訓練されている。

私はともかく、すぐやられるような連中ではないはずだ。

「…あなたも生きて帰ってくること」

「ま、また難易度の高い命令ですね…」

そんな考えを見抜いてか、私だけ特別命令が下される。もちろん、私とて死にたくない。努力はしよう。

「…しばらく、こうさせて」

泣き顔を隠したかったのか。または、不安からか。

とん、と私の胸に、豊崎さんの顔が半ば押し付けるように来る。

抱き合うような姿勢になった。

暫くそうしていると、静かな寝息が聞こえてくる。

どうやら、寝てしまったらしい。

彼女をベットまで運ぼうと思ったが、この小さい私の体では、運べるか不安だ。

仕方がないので、リビングで寝ることにしよう。

ベットから枕と毛布を持ってくる。

豊崎さんの頭を少し持ち上げ、直で床に寝ないように枕を置く。その後、毛布を掛けた。自分はソファアのクッションでも枕にしようか。同じく毛布に入る。

共寝することになったが、許してほしい。さすがにこの季節は寒い。毛布がないと眠れない。

まるで添い寝のように距離が近いが、やましいことはない。…決して。

…何というか、嬉しかった。

普段凜としていて、弱みなんてなさそうな彼女が、こうして私に話してくれたのが嬉しかった。

彼女の支えになれるように、強くなりたい。その決心が、より一層強くなった。

隣に居る彼女の寝息を聞きながら、自分もゆつくりと眠りについ

た。

・  
・  
・

昨日、少し開けたままだったカーテンから強い光が差し込む。

…朝か。

ゆっくりと体を起こす。床で寝たせいか、いくらか体が痛い。

「んー…」

体を伸ばすと、すっきりと意識が覚醒していく。

豊崎さんは…もう居ない。朝が早い人である。

そういえば、今何時だろうか。…朝の7時か。

…ん、朝の7時？

「…まずい！」

…こんなのにびりしている場合ではない。今日は朝練、もとい朝演習…朝演があるのだ。

急いで飛び起き、顔を洗って身支度をして、パンは…通学中に食べるか。ライフルを持ち、急いで玄関へ。

「行つてきます…！」

誰も居ないが、やはり無意識にいつも通りの挨拶をしながら、ドアの鍵を閉める。

パン啜えながら通学つて二次元か、と自分でも思ったがここは二次元だった。何ら問題はない。あとは曲がり角で美少女とぶつからないうよう警戒しながら、急いで学校に向かう。

このペースなら何とか間に合いそうだ。



慌ただしい通学を終え、無事に高校にたどり着く。校庭には、豊崎先生が居た。

「おはようございまーす」

私が挨拶しながら近づく。私と教官の距離が接近するたび、彼女はまるで、近接信管のように頬を染めた。

「き、昨日はごめんなさい…」

「いえ、気にしないでください。先生の貴重な一面も見れましたから」  
ちよつとからかうと、豊崎さんは小さく声にならない声で、また羞恥心を表した。

反撃なのか、ガシツと強く肩を掴まれる。

「忘れて…いえ、忘れなさい…」

「そんな気にしなくても…。昨日の先生、かわいかったですし」

素直にフオローしたつもりだったが、どうやら彼女の恥ずかしさが限界になったらしい。真っ赤になった教官から、照れ隠しのように号令が発せられる。

「かつ、駆け足、進めーっ!」

「い、いきなりですか!?!」

困惑しつつも、条件反射で体が命令通りに動く。構わず、教官から次の照れ隠しが飛んでくる。

「連続歩調ーっ!」

「は、はやっ…、早いです! 教官…!」

12月、聖なる夜の翌朝。若き師弟は今日も走る。  
護るために。

自分を護るため。友を護るため。大切な人々を護るため。  
日常を、そしてまた、来年の聖なる夜のため。

彼と彼女は、今日も走り続ける。

## 第6話 オペレーション・フレンド

こんな言葉を自分が言っている、なんて聞いたら、きつと前世の私は笑っているだろう。

しかし、イクシスのせいで常に生命の危機を感じるせいか、それとも右も左も分からない平行世界に来てしまったせいか、…寂しい。

…友達が欲しい。

唐突にそんな願望をし始めたのは他でもない、本当に…友達が少ないのだ。

豊崎教官から「知り合いでもいいから作りなさい」と指示されているレベルで。

防衛校の正式マニュアルにはこう示されている。『防衛校生徒は、周辺民間防衛組織、特に指定防衛高等学校生徒との連携が推奨されている。』

つまり、日頃から他の防衛校生徒とも連携する必要がある。

戦闘時に自己紹介、なんて暇はないのだ。知らない人物に背中を任せるより、お互いを知っている人物と連携すれば、恐らく戦闘効率は上がる。

前回の人生では平和な世界だったので、そんなに他人と関わらずとも生きていけた。

しかし、この世界では全地域が戦時。安全な場所なんて、どこにもない。こんな世界を1人で戦い抜くのは、絶対無理だ。1人の歩兵より、5人・10人の歩兵のほうが強いのだ。戦いは数だよ兄貴…。

今、私が知り合いと呼べるのは2人。豊崎教官。伽鳥先輩。豊崎教官は優秀な上司だし、伽鳥先輩は頼りになる先輩だ。

確かに、この世界の人たちは皆、優しい。とても優しい…。

…が、何十年と生きてきた対人恐怖症の塊と言ってもいいこの性格は、どうしても…コミュニケーション能力が…大変、低い。

そもそも、人間関係構築が苦手なのだ。

こっちは友達と思っているけど、向こうは何とも思っていないこと。前世でもそんなことがあったなあ。

…があああ…。トラウマを思い出して、思わず銃で自分の頭をぶち抜きたくなつた。

まず、相手が何を考えているか分からない。もうここで怖い。

次、何を言っているのか分からない。ここも怖い。

よく関わる相手だと、今後の関係に支障が出ないように、慎重に言葉を選んで発言しなければならない。口は災いの元、だ。

仕事の打合せ、みたいな事務的な内容は、何ら問題はなく会話できるが…私的な会話だと、完全に狼狽えて、会話にならなくなる。

——『バレルはよく磨いておけ、手を抜かずにな』

『了解です』

『…お前って休日、何してるんだ？』

『…ええつ。…ええ？ えつ、あつ…いえ、あの』

『ああ、いや…言いたくないならいい』

数日前、伽鳥先輩と私の会話だ。

銃の整備という退屈で眠くなる作業に、気を利かせて会話を挟んでくれた先輩だが、全く返答出来てない私の凶。

私の会話能力を即座に察して引いてくれた伽鳥先輩、優しい…ありがたい…。

『えつ。』でいきなりの私的な質問への困惑。次に何と言葉を返そうか迷う。そして未だ答えられていない自分に狼狽え、話そうとする、『いえ、あの』…である。

…ひどい。会話ですらない。Speechスキルが低すぎる。某核戦争後の世界だったら説得する前に撃たれているに違いない。望みが絶たれた…！

これが逆に関わりがない相手だと楽だ、何も考えず適当に話せるので、負担が少ない。

ああ、面倒。億劫だ。いつそ…好感度と会話選択肢が欲しい。

そして、問題は更にもう一つ。

ブラウンカラーの上品そうな雰囲気があるブレザー。城宗女子高  
：私立 城宗統合学院の制服だ。未だ、返せていない。

：言い訳すると、戦いを決意したあの日、あの駅から、ずっと返す  
時間が無かった。この世界に適應するために、必死だったのだ。

——『DDA城宗、特1—A 椎名』

彼女から聞いた、簡潔な自己紹介。

あれから色々調べたのだが、DDAというのは、  
Designated Defense Academyという意  
味らしい。

つまり、そのまま “指定防衛校” だ。

特 は…多分、特殊科 とか 特戦科 とか、特殊部隊みたいな学  
科だろう。

普通科なら 普 の一文字だろうし。

実は特科、砲兵部隊でした。なんてオチもないだろう。砲兵なら、  
野砲の近くに居るのが基本だ。

MP7で武装して、町中を巡回警備するのは野砲隊の仕事ではな  
い。

というか、いくら防衛校でも野砲がある高校はないはず。…ないよ  
ね？

防衛校 城宗。特殊科の一年生 Aクラス、椎名さん。まさか特殊  
部隊員だったとは。いわゆる精鋭歩兵、という立場なのだろうか？

彼女がどんな人なのか、全く知らない。関わりもないし。

だが、これだけの長い時間、上着を返さずにいたというのは…流石  
にまずいだろう。きつと怒っているに違いない。

問題の服は、一応自分で洗濯したものの、更にクリーニング屋に出  
し、ビニールが被せられている。こうしておけば、見た目でも高い清  
潔感を保てるからだ。

音沙汰なしで長い時間待たせてしまったお詫びに、せめて衣服は清  
潔に保ったままお返しします、アピールだ。これで許してくれること

を期待したい。

この引つ込み思案の性格を直さなければならぬし、知り合いは作らなければならぬし、上着は返さなければならぬ。

：問題だらけだ。頭を切り替えよう。

こういう時は鏡を見るに限る。

鏡を見るたび、やはり：どうしても現実味がなくなる。VRゲームでもやっているような感覚になるのだ。

自分の顔や、この世界の街並み。高校生が小銃で武装しているのを見ると、：転生したんだなあ、と再確認させられる。

今更だが、本当に自分が転生するとは、思いもしなかった。

よく考えると、日本人はちよつと転生しすぎではないだろうか。日本国は世界有数の転生人派遣国だった：？

というか、どうせ二次元に転生したのなら、もつとなんか：：：：：特殊な能力とかあると思つたが。

：ない。本当にない。

手から糸なんて出ないし、かつこいい高性能な鋼鉄アーマーもない。自由の星条旗シールドもなければ、魔力で空も飛ばない。

いや、こういうのでありがちな話として、偉い人が色んな物をくれるんじゃないの：：？

無限の体力とか。凄い戦闘力とか。それで、世界を救う旅に出て。ああ勇者様、さすがです！ さすゆう：：みたいなさ：：。

だが。

私は：：本当に：：、普通だ。残念だが。せいぜい、前世の記憶があるくらいだ。

そうだ、何も特殊な能力はないが：顔だけはいい。今のところ：これが唯一、自分が知っている長所だろうか。

うんうん、今日もいい顔だ。腹立たしいほどの：爽やかな面であ

る。きつと今まで、沢山の異性を泣かせてきたに違いない。…中身が私じゃなければ、の話だが。

初めて見た時より、より引き締まった表情になっている。防衛校で経験した訓練のおかげだろうか。

しかし、相変わらずこの世界でも無表情だ。

もう少し…この年代の青年は生き生きしているぞ。まるで感情を感じない。

…ちよつと笑顔でも作ってみようか。

笑顔は人を和ませ癒すだけでなく、話しかけやすい雰囲気醸し出す。そこから会話が生まれ、共感や協調を導き、チームでの仕事では団結力を高める。笑顔は、相手のやる気を引き出す役割も果たす。

…意識高いビジネス書に、そんなことが書いてあったのを何となく覚えている。本当かどうかは知らない。

まあ、美少女の笑顔を見ると嬉しいのは確かだけど。

「…」

上手く笑えているだろうか。少し不自然だろうか。前世でも営業スマイルは苦手だった。

笑顔なんて、笑うなんて、誰でも出来るもん！…なんて嘆いている某アイドルも居たが、私には笑顔すら難しい。

完全な笑顔は無理だな。微笑むぐらいが限界か。

…ちよつと待ってほしい。確かに悪くない顔だが、この世界での私の顔ってどのくらいの品質なんだろうか。

案外、普通の顔だったりするのか。

Bomb Damage Assessment

B、爆撃効果判定、もとい…

My Face Damage

M、F、D、A、自分の顔効果判定が必要ではないのか。

ちなみにMFD Aなんて用語は存在しない。今、私が考えた。

…なんかテンション上がってきた。

よし。Operation Friend

よし。オペレーション・フレンド、OF…フレンド作戦を立案・実

行しようではないか。

作戦第一段階、MFD A。この効果が良好なら友達を作ろう。…そう努力しよう。

そもそも。この世界はあべこべだ。自分には戦術的優位バフが付いている。負けるはずのない戦いだ。…多分。

実を言うと、前世では美少女に転生して、かわいい制服着たい…とか少しだけ願望があった。

美少女にはなれなかったが…あべこべのおかげで、私は美少女もいい、美男子みたいな立場だ。

そして何より。せっかく二次元に来たというのに、他人と関わらないというのは余りにも…もったいない。

そろそろ時間も頃合いだし…登校中に早速、作戦を実行しよう。

『完璧な計画を来週、実行するぐらいなら、次善の計画を今、断固として実行すべきだ。』

第二次大戦、米軍の Patton 将軍も、そう言っていたではないか。

よし、やるぞ…。私はやる！断固たる意志を持って、顔と同じくらい爽やかな性格になってやるぞ。

私は高揚した気分と、謎の勢いで外へ。

たまに、だが…こうして勢いだけで実行してしまうことが、しばしばある。

勿論、普段はよく考えて行動しているし、どうすべきか、も予想しながら行動しているけど…。たまには、勢いだけで突っ込むことも必要だと思うのだ。男という生き物は、バカになるべき時があるのだ…！

・  
・  
・

いつも通りの清々しい朝。

小鳥のさえずり。慌ただしく動く車。自転車の音。

通勤・通学している人々に、疲れた顔をした人は、夜勤上がりだろ

うか。ある人は箒で通りの清掃をしている。

ふと、ベンチに座っている女性と目が合う。ベンチにコーヒーと新聞が置いてあることから、スーツ姿の彼女は通勤中に休憩しながら、朝食をとっているようだ。おしやれな通勤である。

…ど、どうしようか。作戦を実行すべきか。

…いや、やるべきだ。千里の道も一歩から、と言うし。

彼女は名前も知らぬ民間人。きつと今後の人生でも関わることはないだろう。つまり、失敗してもノーダメージ…!

せつかく目が合ったのだ。これも何かの縁だろう。よし、やるぞ

…。緊張してきた。

軽く微笑み、手を挙げる。

…対象は少しの間、フリーズして、小さな動きで、ぎこちなく手を振り返してくれた。顔が紅潮しているのは、きつと寒さのせいだけではないはずだ。

…掴みはよし。いい感じだ。そんなに悪くない結果だと思う。

客観的に今の局地戦を分析。私が元居た世界に当てはまると、無表情の美少女が、自分を見て微笑んだ。

なるほどこれは…クールな子がデレる…。クーデレ…!

私は笑顔になれる、相手も笑顔になれる。Win-Winですね。

ああ、いい気分だ。晴れ晴れとした気分である。他人に好意を示し、それに答えてくれる人が居る。素晴らしきこの世界。

こんなに喜びが胸から溢れそうな感覚は初めてだ。コミュニケーションって大事だったんだな…。

しばらく通学路を歩いていると、婦警さんが職務を遂行している。駐車違反に法の裁きを下しているようだ。

婦警さんもこちらに気が付いたようで、お互いに目が合う。



「おはようございます」

朝の挨拶と共に、笑顔で先制。

……しまった。笑顔になってしまった。ぎこちない顔になっていないだろうか。

どうやら、初戦が上手くいったために舞い上がっていたようだ。

しかし、そんな心配は杞憂であった。

「はうっ」

そんなかわいらしく短い悲鳴を上げ、彼女は胸を押さえながらしやがみ込んでしまう。

上機嫌で出した私の笑顔は作り笑いにならず、本心からの……全火力での笑顔だったのだ。

「だ、大丈夫ですか…!?!」

だが、この反応は予想外だった。困惑しながら、彼女の安否を確かめる。

「あ、ありがとうございます……これで10年は戦えます……」

「そんなに」

婦警さんは、赤く恍惚の表情で荒い呼吸をして、充足感に満ち溢れ、やり切ったと言わんばかりの……大往生のような雰囲気だった。

……堕ちたな……。

しかし、これ以上ない……凄まじい効果だ。自分にこのような力があるとは——素晴らしい。

大して関わりのない相手で、これだ。

もし、普段から会話している相手に不意に笑顔を見せたら。恐ろしい効果を発揮する……ハズだ。

普段無表情の美少女が、急に笑顔になる。クーデレ最高かよ……。

そもそも。前世でオタクガン振りだったのだ。そしてここは、二次元。

アニメやラノベ、恋愛ゲームやらのセリフとシチュエーションを駆使すれば、一瞬にして攻略完了だ。

真面目なあの子から、元気な子まで前世の知識を活かして無双!

伽鳥先輩に『銃だけでなく、恋愛のことも知り…たいです…』とか。豊崎教官に『人生の教官もお願ひします…！』…なんて言ったら、好感度カンストつてすんぽーよ！

いぎ、古流高校へ前進だ。もう何も怖くない。

待つてろよ、私のばら色の人生…！

さあ、明るい未来へ！ セッション・ゴー！

…

…

…

「——それじゃ、ここはこの訓練メニューでね」

「はい、了解しました」

豊崎教官と私。お互いにクリップボードを見ながら予定を確認している。

古流高校。校庭。いつも通りの風景と、いつも通りの会話。日常。

…いや…ね、そんなすぐに、知り合いに馴れ馴れしくできるわけないじゃないですか。

もし、失敗したら。高校生活3年間、気まずい思いをするのだ。リスクが高すぎる。

…つまり、ヘタレたのだ。

臆病者と罵られても何も言い返せない。いや、私は慎重派なのだ…今この現状で一番、安定・安全な生き方をしているだけだ。

「それで…水本くん、誰か友達はできた？」

「うっ…」

言葉に詰まる。できてない。

しかし、ここで何と返すのがいいのだろうか。相手は上司だ。失望させず今後も努力するという意思表示が必要だろう。

私が頭を回転させ、弁解の言葉を考えていると、教官からアドバイスから頂いた。

「そんなに難しく考えなくていいわ」  
「…え？」

「友達っていうのは…自然とできるものよ。お互い、いつの間にか仲良くなるの。…恋と一緒に、本心でぶつかって行きなさい」

ううむ…。そういうものなんだろうか。そういった経験が無いので、全然想像できない。

まあ確かに…計算した上でとか、無理やり作った友達は…友達とは呼べないだろう。お互いに苦痛な関係だ。

「…参考になりました、ありがとうございます」

未だ複合装甲の様なカツチカチの態度で返答する私を見て、豊崎さんは小さく呆れのため息。

「…まるで私の妹みたいね」

「えっ…教官、妹さん居るんですか？」

「ええ。今年から防衛校生徒よ」

ほおー。姉妹で防衛要員とは。教官と同じく、真面目でおしとやかな子なんだろうか。

もつと色々、妹さんのことを聞きたかったが…「今はあなたの話をしているのよ」と話題を戻されてしまった。

「何か…壁を感じるのよね…。もつと笑ったり…年相応に振舞っているのよ？」

「そう言われましても、これが私です」

面識のある相手に笑うのはまだ、まだ難易度が高い。ついでに私は常に無表情なので、笑顔はいちいち意識する必要がある。

彼女のアドバイスは確かにその通りだ。しかし、実行できるかどうかは、また別の問題である。

というか、やはり…まだ人は怖い。問題の先送りだが、知り合いを作るのはもつと後とか、別の日にしていいいんじゃないかな…。

きつと先生から見たら、心を閉ざしていると見られているに違いな

い。しかも記憶喪失。戦闘地域に居た、たった1人の幼い少年。傍から見れば、孤独な惨劇の生存者。

すみません、ただのコミュニケーション障害なだけです…。

その内、メンタル診断でも受けさせられそうだ。何とかしなければ…。

そんなことを考えていたからか、先生が小声で荒療治という小声の呟きに、私は気が付くことはなかった。

・  
・  
・

「……ふっ！」

64式小銃に銃剣を付け、紙の標的へ一突き。今日の自主訓練では近接戦に集中している。

銃剣。射撃武器が発展した今の時代では、剣なんて無用なものであるが、防衛校は市街地戦が多いので、至近距離戦闘が多くなる。

だから、白兵戦の訓練は必須といえるだろう。——つてそうじゃない。

「あー、すみません」

これでは今までと同じではないか。やはり、新しいことをするといふのは難しい。

しかし、現状のままでは良くないのも確か。頭では分かっているも、実行できない自分の性格に呆れるばかりだ。

「あいつ」

「はい!?!」

深い思考に浸っていた私の意識は、聞いたことのない声によって引き戻された。

急いで銃剣を外し、銃剣カバーへ収納。安全管理を徹底。

振り向くと、セーラー服の女子中学生が2人。

パープルカラーのショートボブ。髪と同じく、鮮やかな紫色をした瞳。

上から下まで、よく手入れされた髪の毛や服。恐らく、かなり気を使っているんじゃないだろうか。おしゃれ好きか。

もう1人は、黒色の髪。セミロング：いやロングヘアーだろうか。背中の半ばまで綺麗な髪の毛が伸びている。

しかし、その目つきは鋭く、少し薄い赤みを帯びた、黒目。澄み切った瞳は、凜とした——勇敢そうな顔つきが、強く印象に残る。

そして2人とも、落ち着きのあるクールな顔だ。きつと静かなグループなんだろう。

個人的に、静かな連中は好きだ。私も話すのは苦手だし。

それにしても女子中学生と会話とは緊張するな……。何と返せばいいのだろうか。

というか中学生と会話って事案では…と思ったが、今の私は男子高校生。セーフだな。…高校生。ああ、なんという響きか。高校生…。

…して、このような美少女中学生が、何用だろうか。

防衛校生徒の家族さんとかだろうか？ 姉がここに通ってて…みたいなの。

ならば恐らく今後、私とは関係のない者だ。愛嬌でも振りまいておくか。

「どうされましたか？」

穏やかな声で、小さく微笑み。

完璧だ。接客業ならばかなりの高得点に違いない。しかし。

相手は紫ショートボブの子が嬉しそうに笑い返してくれて、黒髪の子は相変わらず無表情。

うーん。そう何度も上手くいくわけないか。

「急にすみません。今日、この見学に来たんですが…」

「あー、なるほど」

もうそんな時期なんだなあ、と昔を思い出して黙々と考える。

しかし、見学。……うん？

「ええと……ここに進学を？」

「はい、古流高校です」

何て…こつた…つ！ つまり彼女らは…今後の同級生、つまり同僚ではないか。

これは今後の関係のために、慎重に会話する必要がある。

と、ここで黒髪ちゃんから意味不明な発言。

「それで先生から、ここに居る水本さんって人が案内してくれると聞いたんですが」

「えつつつ」

ちよつと待つて聞いてない。どういう事なの…。

確認します…、とだけ言い残し、少し離れて小型無線機を使用する。

「DDA古流、水本。豊崎教官、今、よろしいでしょうか」

『水本、こちら豊崎。個人回線だから無線規定と用語は必要ないわよ』  
「そ、そうですか…。ええと、あのですね…。…見学に来た女子中学生が居まして、何故か案内人が私なんですよ…」

控えめに言つて意味不明な状況だったので、しどろもどろな状況説明になつてしまった。

この後、更に意味不明な返答を頂くのだが。

『あなたで間違いないわ。ちよつと強引だけど…荒療治、よ』

「…な、なんてことを…」

『せつかく同年代の子と会えたんだから、可能な範囲で話してみなさい。おわり』

おわり…通信終了という意味を持つ用語と共に、無線が切れる。

会話しろつて…。ふえええ…、難易度高すぎだよお。

…しかし、遅かれ早かれ、初対面の人と話す必要があったし、彼女らはもうすぐ入学するのだから、逃げという選択肢は元々なかったとも言える。

これも指導の1つか。いざという時、言いたい事があっても言えませんが、じゃ困るしな…。

…私のために気を回してくれたのだ。どんな結果になろうとも、ベストを尽くそう。

「…すみません、お待たせしました。水本 要です、本日はよろしくお願いします」

覚悟を決め、彼女らの位置に戻り、丁寧に挨拶。

物静かな顔をした2人だ。きつと、同じような挨拶が返ってくるに違いない。これなら何とかかなりそうだ。

…なんて、思っていたのだが。

「初めまして！ 朝戸 末世です、よろしく申し上げますっ  
「!?」

紫ショートボブの子から、笑顔で元気に挨拶。

…面喰ってしまった。

何というか、とてもクール系な顔だったので、こんなテンションで挨拶されるとは、予想外だ。明るいキャラに見えない。ギャップが凄

「…白根 凜です、よろしく申し上げます」

黒髪の子は顔と同じく、クール系みたいだな。安心した。

これで元気な挨拶2連続、とかだったら、私の指揮統制率は0になつて戦闘不可能になつていたと思う。

「それにしても、本当にみんな、銃を持ってるんですね…」

「当たり前でしょ、防衛校なんだから」

朝戸さんが関心しながら周りを見渡し、白根さんが突っ込みを入れ

る。

確かに、高校生が銃を持っているなんて…こんな風景、そうそうないよな。

現に、私も肩から負い紐スリングを使い、体に安定させながら64式小銃を所持していた。つれ銃、と呼ばれる姿勢だ。この64式小銃にも興味深そうな視線が注がれている。

「…持ってみますか」

「い、いいんですか？」

正直、民間人に銃火器を渡すのは問題かもしれないが…。数か月もすれば、彼女らもここに入学して、戦うことになる。早くライフルに慣れたほうがいいのかもしれない。

手早く槓桿を引き、薬室を確認。実弾なし、安全だ。安全装置を再確認。

それらの動作を見て、おお…と小さな賞賛の音が2人から上がる。

「随分手馴れてるんですね」

「安全確認は一番大切なことですから…入学したら毎日のように言われますよ」

安全のため引き金には決して触らないように、とだけ伝え、小銃を彼女に渡す。

最初に受け取った朝戸さんは、すぐ渋い顔になった。

「け、結構重いです…!」

「4, 300gですからね…」

「これが…銃…」

白根さんも同じような反応だったが、銃の重さより、初めて触る武器に緊張しているようだ。うつすらと汗が流れている。

…彼女らはまだ中学・高校生。本来なら、武器なんて持たなくていい世代。こんな反応になるのも当たり前か。時間をかけて適応していくしかあるまい。

「えつと…水本さんは今、何年生なんですか？」

2人から小銃を返してもらい、校庭を案内している時、私に質問事



項が。

…また答えずらい質問だ。何と言うのが正解なんだろうか。

「…何というか、ちよつと説明できません。入学はしましたが、まだ正規の生徒ではないというか」

「じゃあ…私たちと同年齢なんですか？」

「そうですね…」

「でも先に防衛校に入学してるし、…ちよつとだけ先輩ですねっ」

「はうっ」

先輩という言葉聞いて無事撃沈する私。…ここだけの話、私は先輩・後輩という言葉に大変弱い。好き。

二次元の萌えワードの定番の1つである。一度も言われたことが無かったので、尚更のこと、あこがれが強かった。

まさかこんな形で言ってもらえるとは。

「先輩って言葉、好きですか？」

「…否定はしません」

「ふふふふ、そうですね」

何というか、朝戸さんは…とても会話が上手な人だ。コロコロと表情や話題を変え、上手に場を盛り上げてくれる。

コミュニケーション能力が大変高い。おかげで私は、先ほどから掌で踊らされているような気分だ。翻弄されている。

つまり、口数が多くなってしまっている。このままではボロを出しかねない。さっさと退却せねば…。

「ん…：…おー、後輩。どうした」

「伽鳥先輩…：… ナイスタイミングです！」

「…？」

この声は伽鳥先輩。まさに渡りに船、だ。

ありがたい…！ 最初から面倒見のいい先輩に任せれば万事解決だったではないか。

そもそも私は校内を知らない。さっさと引き継ぎをして、後をお願いする。

「じゃ、未来の後輩つてわけか。めんどくせーなあ…またひよつこが増えるのか」

そんなことを言っても、頬を染めている伽鳥先輩。やはり、後輩が増えるというのは嬉しいものなんだろうか。

先輩と見学2人が挨拶を交わしているのを見守る。

…しかし、この2人は…、どうして防衛校に来たのだろうか。

ここに入学するということは、民間防衛の最前線に立つのだ。

どうしても他の人が戦う理由が聞きたくて、私は言葉を発した。

「…2人はどうして防衛校に？」

「ええと、…色々理由はあるんですけど、その…イクシスと——」

「未世」

ためらって、はつきり言わない朝戸さんに、白根さんが声をかける。会話の途中だったが、愛想笑いで誤魔化されてしまった。

…言いづらいことなら、別に強要する気はない。そもそも、我々は知り合ったばかりなのだ。

次に目線を白根さんに移し、無言で彼女の回答を待つ。

「優遇制度とか目的はあるけど…」

優遇制度。

防衛校生徒は敵勢力との交戦、そして民間人保護という役割、義務がある。

これら義務の対価として、指定防衛高等学校進学者は、在学中から卒業後に至るまで、各種社会保障の優遇措置を受ける。

これを目当てに進学する生徒も少なからずおり、優遇措置は効果を上げているといえるだろう。

これらの制度だが、非常に給料がいい。

こんなご時世、命を張る仕事の地位は高いようで、軍人はなるべくお金に不自由しないよう配慮がなされている。

私も実戦任務こそ経験したことはないが、数回だけ歩哨任務を受けたことがあった。

歩哨、つまり突っ立っているだけ。警備員みたいなものだが、それでも給料が出て驚いた。

これが戦闘任務だとか危険な作戦になれば、特殊勤務手当だとか、危険手当みたいなもので、更に多めの給料が支払われる。

それらの給料を使って自腹で装備を買って、更に戦闘効率を高める生徒も居るそうだ。

なるほど。お金目当てか。将来のためとか理由は色々あるだろうが、お金はいくらあってもよい。政府が機能している限り、役に立つからな。

しかし、白根さんはまだ理由があったのか、やっぱり——、と言葉を続ける。

「親友を一人にするなんて、できないから」

「り、凜ちゃん……!!」

うるうると涙があふれそうな顔をして、朝戸さんが抱き着く。白根さんも嬉しそうで、まんざらでもない感じだ。

尊い…。

くっ…視界が滲む。もらい泣きしてしまったようだ。

…この2人にもきつとここまで、様々な困難があったんだろう。

しかし、イクシスという厳しい時代の波に飲まれても、彼女らの絆は揺らぐことなく、強く結びついているようだ。私もこんな友達が欲しかった…。

戦う理由は人それぞれだろうが、私はこんな光景を…こんな景色を守る男になりたい…。

伽鳥先輩も、このひよっこ2人が気に入ったようで、嬉しそうに校内案内を始めるのだった。

・  
・  
・

校内の案内を伽鳥先輩に任せ、付近に誰もいなくなり——私の周りには静寂が残った。

未来の同僚と友達にこそなれなかったものの、ああいう戦う理由もあるのかと、感動していた。何故か、清々しい気分だった。

「上機嫌ね、上手くいった？」

「豊崎教官」

後ろからゆっくりと豊崎さんが近づいてきた。先ほどの件の報告を聞きに来てくれたみたいだ。

「私、もつと強くなって…多くのものを、守れるようになります」

「…ええと、友達を作った…のよね？」

「いえ！ 友達にはなれませんでした、知り合いにはなったと思いますー」

「どうということなのよ…」

どうやら荒療治は失敗したようで、教官はよろよろとうろたえる。この新人に友達ができるのは、まだ…もう少し、時間が要るようだった。

・  
・  
・

「ごきげんよう。…んんっ、まだ声が低いかな…」

鏡に映る長い髪。整えられた眉毛や目。

放課後。声の音高を調整しながら、私は女装していた。

いきなりとんでもない…インパクトのある言葉で申し訳ない。待ってくれ、聞いてほしい。これには事情があるのだ。

自分のカバン内部に丁寧に入っているブレザー。城宗高の制服だ、これを返却しに行こうと思っていたのだが。

城宗は女子高…女子高等学校なのだ。つまりその…、女性しか居ないのだ。しかも、かなりお堅い感じの、お嬢様学校らしい。

そして私は男、男性だ。目立ちまくる。…ので、女装をする。

いや、普通に行けばいいだろう…と言われたら、そのとおりなんだが。

この時の私は、余程目立ちたくなかったのか。久々に多くの人と会話をしたせいで、思考能力が落ちていたのか——本気で、女装を考えていた。

髪はかつら。ロングタイプを着用して、顔が隠れるのを期待する。

顔は元々の出来がいいので、少し整えて、このままでも行けるかも。化粧はさすがにやり方を知らない。無理だ。

声はもう仕方ない、そこは上手く臨機応変で行くとして。

「学生ズボンは…まずいか」

男性用の学生ズボンを着ている女子高生は、多分居ないと思う。下は…ジャージでカバーできるか…？ 上半身も制服の上にジャージだな。もう上下ジャージでいいだろう。

これなら陸上部とかの運動系の恰好に見えるな、よしよし。

…結構アリだな。行けるんじゃないだろうか。

運動部のクール系お姉さんって感じになった。ロングの髪というのも中々いい。豊崎さんや白根さんのようだ。

きっと今まで、多くの異性を泣かせてきたに違いはない。…中身が私じゃなければ、の話だが。…この下り、今朝もやったような…。

ともあれ、自信が湧いてきた。こう見えても潜入は得意だ。そもそも、私は影が薄い——存在感のない男だからな。

誠心誠意、謝罪して、素早く離脱。簡単な任務になりそうだ。

・  
・  
・

私立 城宗統合学院 前。

来たはいいが、椎名さんがどこに居るかなんて、全く見当もつかない。残念ながら、現実にはミニMAPもマーカーもないのだ。

通学路でたむろしている女子高生たちに聞いて、情報収集する。

「し、失礼…1年の椎名さんはどちらに」

た、頼む…。上手くいつてくれ。ここでバレたら変態どころではない。い。

私は決して、決して——やましいことをしに来たのではないのだ。

「今日は誰かと帰るって話でしたよね？」

「うーん、待ち合わせなら校門だと思いますが…」

待ち合わせ。つまり、時間が無いということだな。迅速に行動し、素早く作戦目標を達成する必要がある。

「その、あなた…声低いけど大丈夫ですか…？」

「ああつー…、ええつと、元からこんな感じですよ、はい…」

怪しい言い訳すぎるだろ…。しかし、もはや長居は無用。前進する。

情報提供者に静かに頭を下げて会釈。圧倒的感謝。…極力声は出さないほうがいいかも。

去り際、何か小声で言われているような気がしたが…時間がないので、素早く移動する。

・  
・

…その人が立ち去った後、すぐひそひそと。女子高生たちの、話の種になった。

「い、今の人…結構…かつこよくなかった？」

「え、女の人じゃないの?」「声は男の人っぽいけど」

「古流の生徒みただったよ?」

その後、しばらく長髪クール系生徒の噂が話題になり、古流高校に探しに来る他校女子生徒が増えるが——、それはまた、別の話。

・  
・

ふらふらと校門に近づいていくと…居た。

忘れもしない、綺麗な白水色のセミシヨート。

端のほうで、ぽつんと突っ立っている。好機だ、人目が少ない今こそ、突撃の時…！

「あの、突然すみません」

声をかけると、彼女の肩がビクツと跳ねる。誰かに話しかけられるのは、予想外だったのだろうか。

私の姿を見て、一言。

「…誰」

ですよ。そりやそうだ。髪も服装も違うし、身元を隠蔽しようと、必死に顔まで隠している自分は、完全に不審者である。

むしろ気づいてくれたら運命感じるレベル。

正体を明かしてお礼と謝罪をしたいので、もっと物陰に来てほしいのだが…。

「六花さん、お待たせしましたわ。…こちらの方はお知り合いですの？」

穏やかで、品があるような優しい声。

後ろ髪を左右に分け、サンドベージュのような落ち着いた髪色。

何より、美しい緑の瞳。やや日本人離れした…外国人のような美少女。…がこちらに来た。

その問いに、もちろん椎名さんは首を振って拒否する。

んんー？　ここできまさかの第三者。そういえば誰かと帰る、とかなんとか情報提供者が言ってたけど。早すぎない？

つまり、増援部隊である。…撤退したい。

いやいや。…駄目だ、ここで退いたら、それこそ完全に不審者であ

る。

年貢の納め時、だな…。幸い、周りの人もそんなに多くない。真実を知るのも、目の前の2人だけだろう。

観念してかつらを取り、変装を解く。さすがに気づいてもらえたようだ。

「…あの時の」

「あら、あの時のつて…彼ですの？」

その問いに椎名さんは静かに頷く。それらの会話の後、上品そうなお友達がぐすくすと笑う。

不審者扱いから逃れたのはいいが、どうしてこんなに笑われているんだらうか。おろおろと困惑する私。

「うふふふ、ごめんなさい。駅寝していた面白い子って聞いてましたわ。」

女装して来るなんて、噂通りの人ですね…ふふっ」

「いや、違うんですよ…女子高って聞きましたし、その、私なりの配慮といえますか…」

我ながら見苦しい弁解だった。笑いのツボにはまったのか、彼女はまだぐすくす、とお上品に笑っている。

上品そうに見える彼女だが、どこか、いたずらっ子のような…そんな雰囲気も感じられた。この状況、楽しんでますよね…？

というか、駅寝してしまった件…そんな風に言われてたのか…恥ずかしい。

ああ…、本気で恥ずかしい。帰りたい。こんな辱めを受けるとは。くつころ…。マジノ線まで後退して引き籠りたい。なお迂回される模様。

もういい、十分だ。早く上着を返して帰ろう。さっさと脱出するんだ…！



「ええと、遅くなって申し訳ありません…ありがとうございました」  
丁寧な、ビニールで包まれたブレザーを手渡す。

その際、腕を前に出すので上着の袖についている、古流高校の校章が目立つ。どうやら、彼女もこれに気が付いたようだ。

「…古流の生徒だったんだ」

「ああ、いえ…最近入学したといいますか…」

「…ふうん…」

上から下まで、装備の1つ1つさえ、品定めするようにじっくり見られている。

そんなに見られると、何だか恥ずかしい。

「…辞めたほうがいい。向いてない」

「う…」

辛辣う…。こうも包み隠さず、直球で言われるとつらい。どんよりと落ち込む。

やはり、顔や装備、雰囲気を見ただけでそういうの、…経験不足、は分かるものらしい。

「言いすぎですわ、椎名さん。…ごめんなさい、これでも心配しているんですの」

言い方がキツイだけで、私の身を案じての発言だったらしい。死にたくなければ、さっさと辞めておけ…そういう事か。

優しい人だ。その気持ちはありがたいが、私にも意志と意地くらいある。

「自分だけ物陰に隠れているなんて、嫌です。…私も戦います」

「…なら、強くなつて」

戦いたければ強くなれ…ということか。いいだろう、受けて立つ。つい面子を気にして、大きく出て言い返してしまう。私はただの女装男子ではない。ここで威厳を回復させるのだ…！

「ええ、すぐに追いついて——いえ、追い抜かして…強くなりますよ」  
「あらあら、まさかのライバル出現ですわね。しかも異性の。関東圏

最強の椎名さん？」

…：うん？ 関東圏、最強？

何その通り名みたいなの。…：かつこいい。

そうじゃない。最強ってどういうことだ…。そ、そんなに実力のあ  
る人なの…？

そもそも、彼女が特殊戦みたいな兵科に居ることは予想してあつた  
ハズだ。迂闊だった。

思った以上に、とんでもない失言をしてしまった。ヤバいのでは…  
？

「…楽しみにしてる」

楽しみにされてしまった。されても困る。こちらとら、まだ正式  
入学入社してない、ひよっこなんだが。

ま、まあ多分…彼女も本気にしてないだろう。新兵の戯れ言だ。

…：とりあえず自己紹介だけでも、済ましておこうか。

「ええと、古流の水本です。水本 要。よろしくお願いします」

「…城宗 1年、椎名しいな 六花りっか」

今度はフルネームで教えてくれた。相変わらず、無表情だが。

「私立丹下高校 1年、蓮星れんぼし 文奈ふみなと申します。以後、お見知りおき  
を」

以後お見知りおきを、って挨拶使う人初めて見た。いや、初めて…  
は言い過ぎかもしれないが、珍しい挨拶だ。私の世界じゃ死語とか、  
瀕死語なんて扱いを受けている、影の薄い挨拶であった。

本当のお嬢様ってわけか。ごきげんよう、とか使ったりするの  
か…。

次の言葉を待っていると、彼女はじつ、と返したブレザーを眺めて  
いる。何か問題があっただろうか。

「…ドーナツみたいな色。久々に食べたいな」

「…え？」

「いいですわね、行きましようか」

「え？ え？」

ちよつと何言ってるか分からない。そういう話と雰囲気でしたっけ。何で蓮星さんも普通に会話してんの。私に変なの…？

「い、いつも、こんな感じ…なんですか？」

「ええ、そうですわね。 ……とところで、水本さんも一緒にします？」

色々お話してみたいですわ」

「よ、よろしいのでしょうか…？」

私の不安げな問いに、蓮星さんは笑顔で、椎名さんは無表情だが――2人して頷く。

「で、では…失礼します」

「そんなに緊張なさらず。それでは…今日はミズドーナツにでも行きましようか」

ミズドーナツって。女性敬称なのはあべこべ世界だからか。略称だと前世と一緒に呼び方になってしまっただけ。

というか、放課後にドーナツ屋さんって女子高生かよ。…女子高生だったわ。私がこんな青春っぽいことに参加していいのか。

その後、色々聞いたが――蓮星さんの丹下高校は「航空管制」を力リキラムに組み込んだ全国でも珍しい指定防衛校の生徒。現代戦の要である、航空戦力と前線地上戦力を円滑に結びつけることができる人材の育成を教育目的としている防衛校に在校しているとか。

彼女が属する特殊戦科は、前線部隊に同行して綿密な航空支援を要請・管制できる「統合火力支援管制員」の資格を卒業までに取得を目指す学科であるが、その門は狭く険しい。…らしい。

つまり、軍で言うところの…  
Forward Air Controller、前線航空管制官。  
Joint Terminal Attack Controller、統合末端攻撃統制官。  
また、J T A C、

…あたりの役職になる。

某防衛軍に例えて言うなら、エアレイダー。分かりやすく言うと、空爆要請兵。

もつと簡単に言うなら、地上から軍の飛行機を誘導する人。

：意味が分からない。将来的には資格さえ取得できれば、彼女の指示で輸送ヘリが飛んできたり、場合によっては戦闘機が空爆するとうことだろうか。

高校生が航空管制に空爆指示とか、とんでもない世界だな…。

椎名さんは統合特殊作戦科。

「特殊部隊」開発・育成を目的に設立された指定防衛校、私立城宗統合学院の生徒。

エリート校として名を馳せる城宗統合学院で——更に精鋭の、特殊戦科に所属している。

物静かで大人しい性格。だが、鋭い観察眼と身体能力を持っている、らしい。

Close Quarters Battle

C Q B、近接戦闘スキルが非常に高い…と高評価されているそうだ。

だが、戦闘から離れると、途端に物事に鈍感になる。反応も鈍い。ちなみに蓮星さん曰く「昔からそんな感じ」だと。

恐らく、戦闘モードでのスイッチオン、オフがあるのだ。切り替え上手な兵士のようなのだ。

ちなみに、これらを話してくれたのは、ほぼ蓮星さんである。

椎名さんも、会話に参加しているもの——頷いたり、それは言わなくていい…とか、少し照れながら小声を挟む程度。あまり話さない。

今のように、無口で大人しい人だが…戦闘になると、恐ろしい戦闘力を発揮する、らしい。…ええー？ほんとにごさるかあ？

…ともあれ。つまり、この2人は…特殊戦科と統合特殊作戦科。精鋭コンビ。

お、おかしい…。おまえらのような高校生がいるか。

少々：いや、かなり：私の知っている女子高生とは、かけ離れている彼女らだが：

そんな2人も、好きな食べ物の話もするし、明日の課題の愚痴だつてする。

：何だかんだ言っても、やはり年頃の女の子なのだ。  
不思議な子たちだけど、その前に、普通の子なんだ、と再認識させられた。

：自分は一体、何を恐れていたのだろうか？

拒絶されること、だろうか。

豊崎教官。伽鳥先輩。今日、そして今まで出会った人たち。私が彼女たちに、一度でも突き放された時が、あっただろうか。

時代、状況が違っても同じ人間だ。

人と話すのが怖くて、言い訳して、壁を作つて、逃げていたのは、私のほうではないか。

：恐れなくていい。彼女らは普通の女子高生で。そして、彼女たちは共に戦う仲間だ。

そんな：簡単なことだったのだ。

「とてもいい表情ですわ。何かありました？」

「……ええ、気持ちの整理ができました」

：そうだな。

次からは——もう少しだけ、自分から：人に歩み寄ってみようと思う。